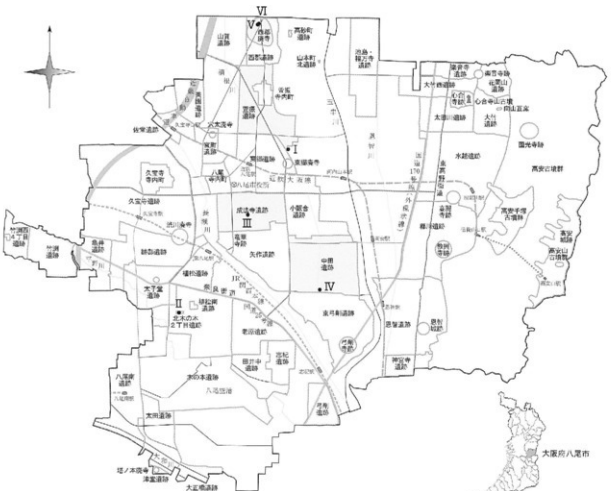
Ⅰ　萱振遺跡(第28次調査)
Ⅱ　北木の本２丁目遺跡(第１次調査)
Ⅲ　成法寺遺跡(第27次調査)
Ⅳ　中田遺跡(第55次調査)
Ⅴ　西郡廃寺(第６次調査)
Ⅵ　西郡廃寺(第９次調査)

2016年

公益財団法人八尾市文化財調査研究会

Ⅰ　萱振遺跡(第28次調査)
Ⅱ　北木の本２丁目遺跡(第１次調査)
Ⅲ　成法寺遺跡(第27次調査)
Ⅳ　中田遺跡(第55次調査)
Ⅴ　西郡廃寺(第６次調査)
Ⅵ　西郡廃寺(第９次調査)



2016年

公益財団法人八尾市文化財調査研究会

はしがき

八尾市は、大阪府の東部に位置し、西は上町台地、東は生駒山地、南は羽曳野丘陵に囲まれた山麓・丘陵先端から平野部にかけて立地しています。山麓や丘陵先端部には、古く旧石器時代に遡る人々の生活の痕跡が点在するほか、生駒山地西麓には全国的にも知られる古墳時代後期の群集墳「高安古墳群」が形成されています。また平野部には、古大和川水系が運び続ける土砂が厚く堆積しており、その中に、縄文時代以降の生活の跡が連綿と積み重なっています。

このような先人の残した財産－埋蔵文化財－は、市民が共有すべき財産であるといっても過言ではありません。しかし、市民生活の利便性や豊かさを追求するための開発工事は、一方ではこのような共有財産を破壊することが前提となってしまいます。そこで、私どもは、開発工事によって破壊される埋蔵文化財について事前に発掘調査を行い、記録保存・研究に努めています。

本書は平成21～25年度に行った民間の開発に伴う５遺跡、６件の発掘調査の報告をまとめたものです。主な成果としては、萱振遺跡では、弥生時代後期、古墳時代前期、平安時代の遺構を確認し、各時期の集落域は当遺跡の南部へ広がることが判りました。北木の本２丁目遺跡では、平安時代後半～鎌倉時代後期の居住域の存在が明らかになりました。成法寺遺跡では、中世以降安定した居住域となることが判明しました。中田遺跡では、古墳時代初頭前半の居住域と墓域を確認し、両域が共存していることが判り、また、古墳時代前期末の古墳を確認しました。西郡廃寺では、古墳時代前期、古墳時代後期、平安時代後期～鎌倉時代の居住域を確認しました。

本書が地域史、ひいては日本史解明の一助になれば幸いに存じます。

最後になりましたが、多くの関係諸機関および地元の皆様方に、多大な御協力をいただきましたことを心から厚く御礼申し上げます。

平成28年3月

公益財団法人　八尾市文化財調査研究会

理事長　平野佐織

序

1．本書は、財団法人八尾市文化財調査研究会が平成21～25年度に実施した、民間開発に伴う発掘調査の成果報告を収録したもので、内業整理及び本書作成の業務は各現地調査終了後に着手し、平成28年３月をもって終了した。
1．本書に収録した報告は，下記の目次のとおりである。
1．本書に収録した各調査報告の文責は、Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ西村公助、Ⅲ・Ⅳ坪田真一、Ⅵ成海佳子・西村で、全体の構成・編集は西村が行った。
1．本書掲載の地図は，大阪府八尾市役所発行の2,500分の１（平成８年７月発行）・八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布地図』（平成27年度版）をもとに作成した。
1．本書で用いた標高の基準は東京湾標準潮位（T.P.）である．
1．本書で用いた方位は磁北、又は座標北（国土座標第Ⅵ系［日本測地系］）を示している。
1．遺構名は下記の略号で示した。
　井戸－ＳＥ　土坑－ＳＫ　溝－ＳＤ　小穴・ピット－ＳＰ　落込み－ＳＯ　自然河川－ＮＲ
1．遺物実測図の断面表示は、須恵器が黒、その他が白を基調とした。
1．土色については『新版標準土色帖』1997年後期版　農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修を使用した。
1．各調査に際しては、写真・カラースライド・実測図を、後世への記録として多数作成した。各方面での幅広い活用を希望する。

目　次

はしがき
序
Ⅰ　萱振遺跡第13次調査（ＫＦ2013－28）……1
Ⅱ　北木の本２丁目遺跡第１次調査（ＮＳＫ2013－１）……13
Ⅲ　成法寺遺跡第27次調査（ＳＨ2013－27）……29
Ⅳ　中田遺跡第55次調査（ＮＴ2012－55）……45
Ⅴ　西郡廃寺第６次調査（ＮＫＴ2009－６）……63
Ⅵ　西郡廃寺第９次調査（ＮＫＴ2011－９）……77
報告書抄録

Ⅰ　萱振遺跡第28次調査（ＫＦ2013－28）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市旭ヶ丘一丁目110番、111番で実施した、店舗新築工事に伴う萱振遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書である。
1．本書で報告する萱振遺跡第28次調査（ＫＦ2013－28）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財発掘調査指示書に基づくもので、申請者と公益財団法人八尾市文化財調査研究会の間で、八尾市教育委員会を立会者として締結した契約により、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が申請者から委託を受けて実施したものである。
1．調査は当調査研究会　西村公助が担当した。
1．現地調査は、平成25年４月23日～５月１日（実働４日）に実施した。調査面積は約29.0㎡である。
1．現地調査には伊藤静江・梶本潤二・芝﨑和美・竹田貴子・村田知子が参加した。
1．内業整理は下記が行い、現地調査終了後に着手して平成28年３月31日をもって終了した。
　遺物実測－飯塚直世
　遺物トレース－市森
　デジタルトレース－西村
　遺物写真撮影・編集－西村
1．本書の執筆・編集は西村が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……1
2．調査概要……2
　1）調査の方法と経過……2
　2）基本層序……2
　3）検出遺構と出土遺物……2
3．まとめ……7

Ⅰ　萱振遺跡第28次調査（ＫＦ2013－28）

1．はじめに

萱振遺跡は、大阪府八尾市の北西部に位置している。現在の行政区画では緑ヶ丘一～五丁目、萱振町一～七丁目、北本町三・四丁目、楠根町一丁目、旭ヶ丘一・四・五丁目にあたり、東西約0.5～0.9㎞、南北約1.1㎞がその範囲とされている。今回の調査は、当研究会が萱振遺跡で行う第28次調査である。

地理的には、旧大和川及びその支流の河川による沖積作用によって形成された河内平野のほぼ中央部にあたる。周辺には、奈良～室町時代の居住域が検出した西郡遺跡、古墳時代初頭の居住域が見つかっている東郷遺跡、古墳時代前期の河川、奈良時代の河川などが発見された小阪合遺跡が隣接している。

周辺の調査（第１図を参照）では、北西側の萱振遺跡(94－281)の調査で、古墳時代後期の遺構を検出している（吉田1995）。また、西側の東郷遺跡の府教委による調査では、弥生時代前期～中世に至るまでの遺物が出土した自然流路を検出している（奥1989）。北東側の東郷遺跡第１次では、平安時代の井戸を検出した（米田1981）。さらに南西側約150ｍの東郷廃寺(90－531・94－730)（道1995・1996）では、飛鳥時代の瓦が出土し、同時代の寺域の可能性が指摘されている。

このような既往の調査から、今回の調査地では上記当該期に関連する遺構・遺物の存在が想定された。

第１図　調査地周辺図

2．調査概要

1）調査の方法と経過

今回の調査は、店舗新築工事に伴う発掘調査で、建物基礎部分を対象に実施した。南西側の調査区を第１区とし、以下時計回りに第６区までの合計６ヶ所の調査区を設定した。掘削は、現地表下1.6m前後の地層を機械、以下厚さ0.2m前後の地層を人力で行った。調査では、調査地東部に位置する八尾市補助点3B389(T.P.+8.078m)を標高の基準とした。

2）基本層序

現地表下2.0mまでで９層の基本層序を確認した。

０層　盛土・客土(T.P.+8.0m前後)。層厚は約0.6～0.7mを測る。

１層　暗灰色細粒砂混粘土(T.P.+7.3～7.4m)。旧耕作土で、層厚は約0.1～0.2mを測る。近代降に比定できる。

２層　オリーブ褐色細粒砂混粘土(T.P.+7.2m)。作土層で、層厚は約0.1～0.2mを測る。

３層　褐灰色シルト質粘土(T.P.+7.0～7.1m)。湿地性堆積層で、層厚は約0.2～0.3mを測る。

４層　オリーブ色シルト質粘土(T.P.+6.8m)。湿地性堆積層で、層厚は約0.1～0.3mを測る。

５層　灰黄褐色シルト質粘土(T.P.+6.6～6.7m)。湿地性堆積層で、層厚は約0.1～0.3mを測る。層内からは中世の土師器、瓦器の細片が出土した。

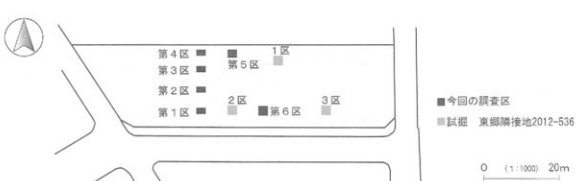
６層　灰黄褐色細粒砂混粘土質シルト(T.P.+6.4～6.5m)。作土層で、上面は撹拌を受け土壌化している。層内からは古墳時代中期末～後期初頭の須恵器、奈良～平安時代の土師器、須恵器、黒色土器、瓦等の細片が出土した。層厚は約0.1～0.2mを測る。

７層　灰褐色粘土質シルト(T.P.+6.3m)。湿地性堆積層で、上面は土壌化している。層厚は約0.1～0.2mを測る。

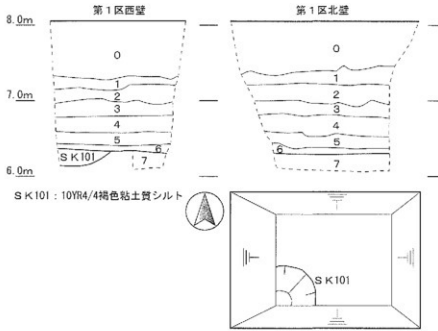
８層　10Y5/1灰色シルト質粘土(T.P.+6.1m)。湿地性堆積層で、層厚は約0.1m以上を測る。

3）検出遺構と出土遺物

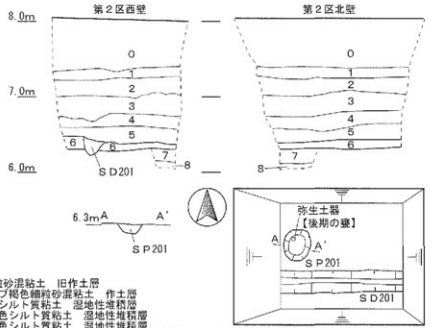
６層上面からは平安時代の溝３条(ＳＤ201・301・601)、７層上面からは古墳時代前期(布留式期)の土坑４基(ＳＫ101・401・501・601)、小穴１個(ＳＰ601)、弥生時代後期の小穴１個(ＳＰ201)を検出した。



第２図　調査区位置図



第１区７層上面平面図



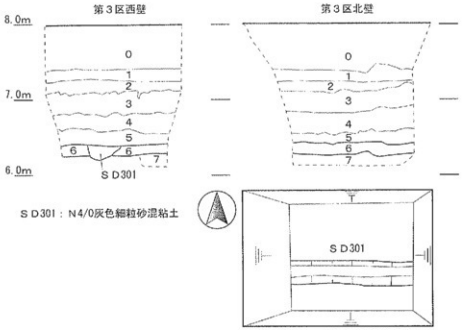
０：盛土
１：N3/0暗灰色細粒砂混粘土　旧作土層
２：2.5Y4/3オリーブ褐色細粒砂混粘土　作土層
３：10YR5/1褐灰色シルト質粘土　湿地性堆積層
４：5Y5/4オリーブ色シルト質粘土　湿地性堆積層
５：10YR5/2灰黄褐色シルト質粘土　湿地性堆積層
６：10YR4/2灰黄褐色細粒砂混粘土質シルト　遺物包含層　上面土壌化
７：7.5YR4/2灰褐色粘土質シルト　湿地性堆積層　上面土壌化
８：10Y5/1灰色シルト質粘土　湿地性堆積層

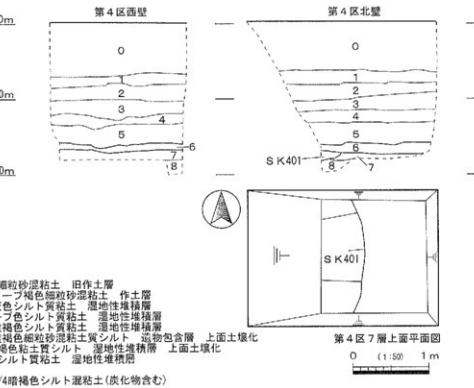
ＳＤ201：N5/0灰色細砂
ＳＰ201：10YR4/4褐色細粒砂混粘土

第２区６・７層上面平面図

0　(1:50)　1m

第３図　第１・２区　平・断面図

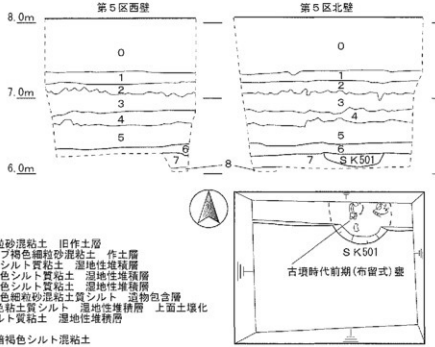




0：盛土
1：N3/0暗灰色細粒砂混粘土　旧作土層
2：2.5Y4/3オリーブ褐色細粒砂混粘土　作土層
3：10YR5/1褐灰色シルト質粘土　湿地性堆積層
4：5Y5/4オリーブ色シルト質粘土　湿地性堆積層
5：10YR5/2灰黄褐色シルト質粘土　湿地性堆積層
6：10YR4/2灰黄褐色細粒砂混粘土質シルト　遺物包含層　上面土壌化
7：7.5YR4/2灰褐色粘土質シルト　湿地性堆積層　上面土壌化
8：10Y5/1灰色シルト質粘土　湿地性堆積層

SK401：10YR3/4暗褐色シルト混粘土（炭化物含む）

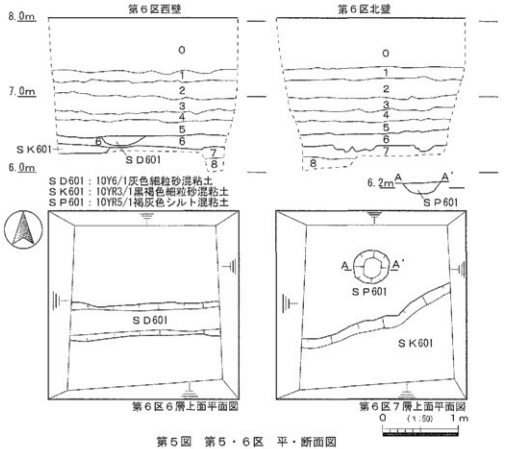
第４図　第３・４区　平・断面図



0：盛土
1：N3/0暗灰色細粒砂混粘土　旧作土及
2：2.5Y4/3オリーブ褐色細粒砂混粘土　作土層
3：10YR5/1褐灰色シルト質粘土　湿地性堆積層
4：5Y5/4オリーブ色シルト質粘土　湿地性堆積層
5：10YR5/2灰黄褐色シルト質粘土　湿地性堆積層
6：10YR4/2灰黄褐色細粒砂混粘土質シルト　遺物包含層
7：7.5YR4/2灰褐色粘土質シルト　湿地性堆積層　上面土壌化
8：10Y5/1灰色シルト質粘土　湿地性堆積層

ＳＫ501：10YR3/4暗褐色シルト混粘土

第５区７層上面平面図



ＳＤ601：10Y6/1灰色細粒砂混粘土
ＳＫ601：10YR3/1黒褐色細粒砂混粘土
ＳＰ601：10YR5/1褐灰色シルト混粘土

第６区６層上面平面図
第６区７層上面平面図

第５図　第５・６区　平・断面図

6層上面検出遺構

ＳＤ201

ＳＤ201は第２区の南部で検出した。東西方向に直線に伸び、幅0.3m、深さ0.2mを測る。埋土はN5/0灰色細粒砂で土師器の細片が出土した。

ＳＤ301

ＳＤ301は第３区の南部で検出した。東西方向に直線に伸び、幅0.45m、深さ0.2mを測る。埋土はN4/0灰色細粒砂混粘土で土師器の細片が出土した。

ＳＤ601

ＳＤ601は第６区の南部で検出した。東西方向に直線に伸び、幅0.6m、深さ0.15mを測る。埋土は10Y6/1灰色細粒砂混粘土で平安時代の土師器・黒色土器の細片が出土した。

7層上面検出遺構

ＳＫ101

ＳＫ101は第１区の南西部で検出した。南西側は調査区外に至るため平面形状および規模は不明である。検出した部分では、東西0.5m、南北0.5m、深さ0.2mを測る。埋土は10YR4/4褐色粘土質シルトで、古式土師器の細片が出土した。

ＳＫ401

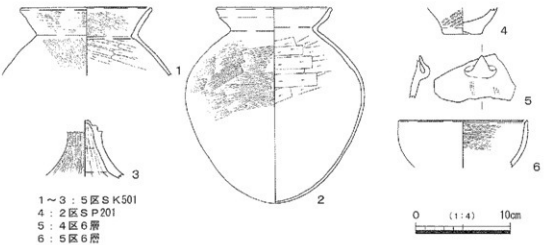
ＳＫ401は第４区の西部で検出した。西側は調査区外に至るため平面形状および規模は不明である。検出した部分では、東西0.6m、南北幅1.5m、深さ0.15mを測る。埋土は10YR3/4暗褐色シルト混粘土で、古式土師器の細片が出土した。

ＳＫ501

ＳＫ501は第５区の北部で検出した。北側は調査区外に至るため平面形状および規模は不明である。検出した部分では、東西0.8m、南北幅0.55m、深さ0.2mを測る。埋土は10YR3/4暗褐色シルト混粘土で、古式土師器の甕・高杯などの破片が出土した。このうち３点（１～３）を図化した。１は古式土師器甕である。口縁部は「く」の字に折れ曲がり、外反する。端部は上部へつまみ出す。口縁部の内外面はハケナデのちナデを施す。体部の内面はヘラケズリ、外面はハケナデを施す。２は古式土師器甕である。口縁部は内湾する。体部は丸い器形で、上位に最大径をもつ。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はヘラケズリ、外面はハケによるナデを施す。３は古式土師器高杯である。脚部は柱状である。脚部の内面はナデており、しぼり目が確認できる。外面はヘラミガキを縦方向に施す。遺構の時期は出土遺物から古墳時代前期前半（布留式期古相Ⅱ）に比定できる。

ＳＫ601

ＳＫ601は第６区の南部で検出した。南側は調査区外に至るため平面形状および規模は不明である。検出した部分では、東西2.0m、南北幅1.3m、深さ0.15mを測る。埋土は10YR3/1黒褐色細粒砂混粘土で、古式土師器の細片が出土した。



1～3：5区ＳＫ501
4：2区ＳＰ201
5：4区6層
6：5区6層

第６図　出土遺物実測図

ＳＰ201

ＳＰ201は第２区の西部で検出した。平面形状は楕円形で、長径0.4m、短径0.35mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.1mを測る。埋土は10YR4/4褐色細礫混粘土で、弥生土器などの細片が出土した。このうち１点(４)を図化した。４は弥生時代後期の甕である。底部は突出し、底面は上げ底である。体部の内面は板状工具によるナデ、外面は右上がりのタタキ目を施す。

ＳＰ601

ＳＰ601は第６区の北部で検出した。平面形状は円形で、径0.5mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.2mを測る。埋土は10YR5/1褐灰色シルト混粘土で、遺物の出土はなかった。

遺構に伴わない出土遺物

第６層からは土師器・須恵器などの細片が出土した。このうち２点(５・６)を図化した。５は奈良時代末期～平安時代初頭の土師器鍋である。体部に把手が貼り付く。体部の内面はナデ、外面は縦方向のハケナデ、把手部はナデを施す。６は平安時代後期頃の黒色土器椀である。口縁部は内湾する。端部に凹線を施す。内面は横方向のヘラミガキ、外面はナデを施す。内面は炭素が付着し黒色である。

３．まとめ

今回の調査では、７層上面で弥生時代後期の小穴と古墳時代前期(布留式期)の土坑・小穴、６層上面で平安時代の溝を検出した。弥生時代後期の遺構は、本調査の周囲では皆無に近い状況であり、同時期の居住域の存在が新たに確認された。古墳時代前期(布留式期)の遺構は本地から北へ約150～200mの壹振遺跡第12次調査地(原田2008)や同第14次調査地(原田2008)で検出していることから、居住域が南側へ広がっていることが判明した。６層上面から切り込む溝は排作に伴う素掘り溝であり、平安時代頃には当地は生産域に変化していることが明らかになった。

また、今回の調査地の６層からは古墳時代中期末～後期初頭や奈良～平安時代の遺物が出土した。古墳時代中期末～後期初頭の遺構は本地から北西へ約60mの壹振遺跡(94-281)調査地(吉田

1995)や西へ約150mの東郷遺跡第60次調査地(樋口2010)で検出しており、奈良時代の遺構は本地から南へ約100mの東郷廃寺(94－730)調査地(滝1996)で検出していることから、今回の調査地にも同時期の遺構が存在している可能性が高いと考えられる。

【参考文献】

・米田敏幸　1981「東郷遺跡発掘調査概要」『八尾南遺跡・東郷遺跡発掘調査概要　八尾市文化財調査報告６』昭和55年度国庫補助事業　八尾市教育委員会

・奥　和之　他　1989　『東郷遺跡発掘調査概要・Ⅰ』―八尾市楽ヶ丘・旭ヶ丘所在―　大阪府教育委員会

・滝　斎　1995『八尾市文化財紀要７』八尾市教育委員会文化財課

・滝　斎　1996「11.東郷廃寺(94－730)の調査」『八尾市内平成７年度発掘調査報告書』　八尾市文化財調査報告33　平成７年度国庫補助事業　八尾市教育委員会

・吉田野乃　1995「２.萱振遺跡(94－281)の調査」『八尾市内平成６年度発掘調査報告書Ⅱ』　八尾市文化財調査報告32　平成６年度公共事業　八尾市教育委員会

・原田昌則　2008「Ⅰ　萱振遺跡第12次調査(KF91-12)」『萱振遺跡　財団法人八尾市文化財調査研究会報告109』財団法人八尾市文化財調査研究会

・原田昌則　2008「Ⅰ　萱振遺跡第14次調査(KF93-14)」『萱振遺跡　財団法人八尾市文化財調査研究会報告109』財団法人八尾市文化財調査研究会

・樋口　薫　2010「Ⅲ　東郷遺跡第60次調査(TG2003-60)」『東郷遺跡　財団法人八尾市文化財調査研究会報告130』財団法人八尾市文化財調査研究会

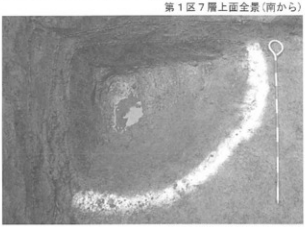
図版1

調査地周辺（南東から）

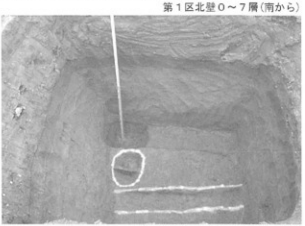
調査地周辺（北西から）

第１区７層上面全景（南から）

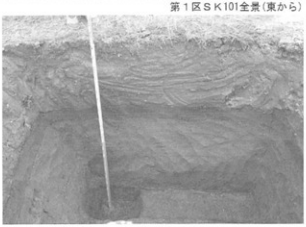
第１区北壁０～７層（南から）



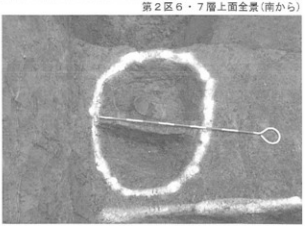
第１区ＳＫ101全景（東から）



第２区６・７層上面全景（南から）

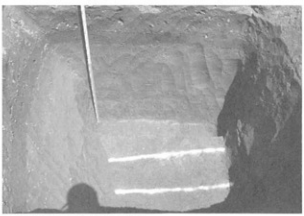


第２区北壁０～８層全景（南から）

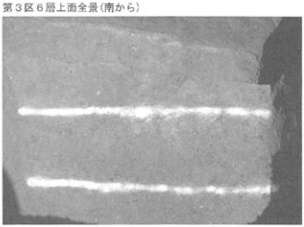


第２区ＳＰ201全景（南から）

図版2

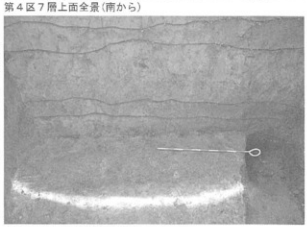

第３区６層上面全景（南から）

第３区北壁０～７層（南から）


第３区ＳＤ301全景（南から）

第４区７層上面全景（南から）

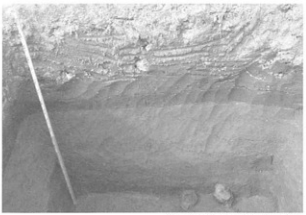
第４区北壁０～８層（南から）


第４区ＳＫ401全景（東から）

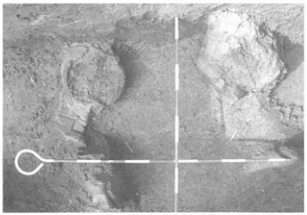
第５区調査状況（西から）

第５区７層上面全景（南から）

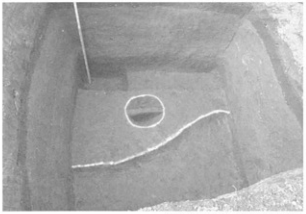
図版3


第５区北壁０～７層（南から）

第５区ＳＫ501全景（南から）


第５区ＳＫ501遺物出土状況（南から）

第６区６層上面全景（南から）


第６区７層上面全景（南から）

第６区北壁０～８層（南から）

1

5

2

出土遺物

Ⅱ　北木の本２丁目遺跡第１次調査（ＮＳＫ2013－１）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市北木の本二丁目17番１、18番１、19番、20番、21番、22番１、23番２で実施した、分譲住宅建設に伴う北木の本２丁目遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書である。
1．本書で報告する北木の本２丁目遺跡第１次調査（ＮＳＫ2013－１）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財発掘調査指示書に基づくもので、申請者と公益財団法人八尾市文化財調査研究会の間で、八尾市教育委員会を立会者として締結した契約により、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が申請者から委託を受けて実施したものである。
1．調査は当調査研究会　西村公助が担当した。
1．現地調査は、平成25年８月５日～８月９日（実働５日）に実施した。調査面積は約32.5㎡である。
1．現地調査には飯塚直世・國津れいこ・田島宜子・永井律子・村田知子が参加した。
1．内業整理は下記が行い、現地調査終了後に着手して平成28年３月31日をもって終了した。
　遺物実測－飯塚・市森千恵子・國津・芝崎和美・竹田貴子・田畠・永井・村井俊子・村田
　遺物トレース－伊藤静江・永井・村田
　デジタルトレース－西村
　遺物写真撮影・編集－西村
1．本書の執筆・編集は西村が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……13
2．調査概要……13
　1）調査の方法と経過……13
　2）基本層序……14
　3）検出遺構と出土遺物……14
3．まとめ……24

Ⅱ　北木の本２丁目遺跡第１次調査（ＮＳＫ2013－１）

１．はじめに

北木の本２丁目遺跡は、大阪府八尾市の南西部に位置している。現在の行政区画では北木の本二丁目にあたり、東西約110m、南北約45mがその範囲とされている。今回の調査は、当研究会が北木の本２丁目遺跡で行う第１次調査である。

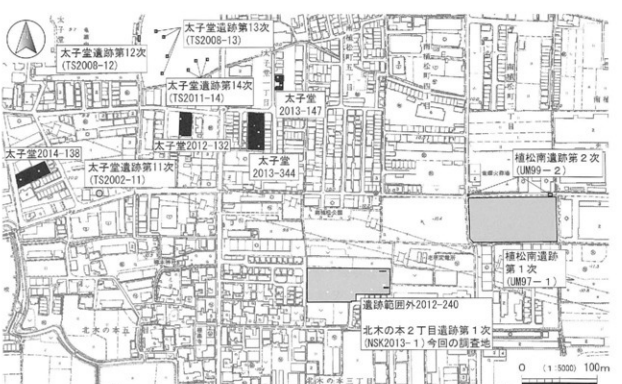
当遺跡は地理的には、長瀬川左岸と平野川右岸の間の沖積地に立地する。周辺には、弥生時代中期～中世の遺構が見つかっている植松南遺跡、奈良時代の居住域や平安時代の生産域を確認している太子堂遺跡が近接している。

周辺の調査（第１図を参照）では、北西側の植松南遺跡第１次調査で、弥生時代後期～古墳時代前期、奈良時代の居住域が見つかっている（森本1998）。また、北西の太子堂遺跡第11次では平安時代後期の生産域が見つかっている（西村2005）。

２．調査概要

１）調査の方法と経過

今回の調査は、分譲住宅建設に伴う発掘調査で、管路部分と防火水槽部分を対象に実施した。管路部分を第１区とし、防火水槽部分を第２区とした。掘削は、現地表下0.3～0.5m前後の地層を機械、以下厚さ0.3m前後の地層を人力で行った。調査で使用した標高は、八尾市街区補助点4A060（調査地南西部：T.P.+10.148m）である。



第１図　調査地周辺図

第２図　調査区位置図

２）基本層序

現地表下0.8mまでで６層の基本層序を確認した。

０層　盛土・客土　現地表面はT.P.+9.6～9.7m。層厚は約0.1mを測る。現代に比定できる。

１層　暗オリーブ灰色(5GY3/1)粘土質シルト(T.P.+9.5m)。旧耕作土。層厚は約0.05～0.15mを測る。近代以降に比定できる。

２層　にぶい黄褐色(10YR5/3)～にぶい黄色(2.5Y6/3)粘土質シルト(T.P.+9.4m)。作土層。層厚は約0.1～0.15mを測る。瓦器、土師器などが出土した。

３層　にぶい黄褐色(10YR5/4)粘土質シルト(T.P.+9.3～9.4m)。中世の遺物包含層。層厚は約0.05～0.1mを測る。

４層　にぶい黄橙色(10YR6/3)粘土質シルト(T.P.+9.2～9.25m)。古墳時代～中世の遺物包含層である。層厚は約0.05～0.2mを測る。上面は土壌化し、遺構を検出した。

５層　にぶい黄橙色(10YR6/4)～灰黄褐色(10YR4/2)粘土質シルト(T.P.+9.1～9.15m)。河川堆積層。層厚は約0.4m以上を測る。上面は土壌化し、遺構を検出した。

３）検出遺構と出土遺物

第１区

４層上面で鎌倉時代後期(13世紀後半)の溝１条(ＳＤ1101)、５層上面で、平安時代後期(11世紀後半)と鎌倉時代前期(13世紀前半)の土坑４基(ＳＫ1201～1204)、小穴３個(ＳＰ1201～1203)を検出した。

ＳＤ1101

第１区の東部で検出した。南北方向に直線に伸び、幅0.3m、深さ0.1mを測る。埋土は暗灰色(N3/0)粘土質シルトで、13世紀前半の土師器小皿・羽釜・瓦器椀などが出土した。この内３点(１～３)を図化した。１は土師器小皿である。２は土師器羽釜である。３は瓦器椀である。

ＳＫ1201

第１区の東部で検出した。平面の形状は南北に長い楕円形で、長径0.65m、短径0.5mを測る。断面の形状は逆台形で、深さ0.1mを測る。埋土は褐色(10Y4/4)細粒砂混粘土で、炭化物を含み、13世紀前半の土師器小皿・羽釜・瓦器椀・小皿などが出土した。この内２点(４・５)を図化した。

４は瓦器椀である。５は瓦器小皿である。

ＳＫ1202

ＳＫ1201の西部で検出した。平面の形状は南北に長い楕円形で、長径0.9m、短径0.6mを測る。断面の形状は逆台形で、深さ0.15mを測る。埋土は褐色(10Y4/4)細粒砂混粘土で、炭化物を含み、土師器小皿、11世紀後半の瓦器椀、軒平瓦などが出土した。この内３点（６～８）を図化した。６は土師器小皿である。７は瓦器椀である。８は軒平瓦である。８の瓦当部には中心飾りに蓮子を、左右に唐草文を施す。類例には大阪府松原市立部遺跡(観音寺遺跡)出土の平安時代後期の軒平瓦がある(市本2001)。

ＳＫ1203

ＳＫ1202の西部で検出した。平面の形状は南北に長い楕円形で、長径1.0m、短径0.75mを測る。断面の形状は逆台形で、深さ0.1mを測る。埋土は褐色(10Y4/4)細粒砂混粘土で、炭化物を含み、11世紀後半の土師器小皿などが出土した。この内１点（９）を図化した。９は土師器小皿である。

ＳＫ1204

ＳＫ1203の西部で検出した。平面の形状は南北に長い楕円形で、長径0.75m、短径0.6mを測る。断面の形状は逆台形で、深さ0.1mを測る。埋土は褐色(10Y4/4)細粒砂混粘土で、炭化物を含み、11世紀後半の土師器・瓦器椀などが出土した。

ＳＰ1201

第１区の東部で検出した。平面の形状は円形で、径0.35mを測る。断面の形状は逆台形で、深さ0.1mを測る。埋土は灰色(10Y6/1)細粒砂混粘土で、13世紀前半の土師器小皿・瓦器椀、などが出土した。この内１点(10)を図化した。10は土師器小皿である。

ＳＰ1202

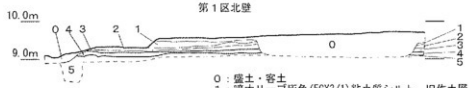
ＳＰ1201の西部で検出した。平面の形状は南北に長い楕円形で、長径0.45m、短径0.35mを測る。断面の形状は皿形で、深さ0.1mを測る。埋土は灰色(10Y6/1)細粒砂混粘土で、13世紀前半の土師器小皿・瓦器椀などが出土した。この内１点(11)を図化した。11は瓦器椀である。

ＳＰ1203

ＳＰ1202の西部で検出した。平面の形状は南北に長い楕円形で、長径0.45m、短径0.3mを測る。断面の形状は逆台形で、東側が部分的に深く、深さ0.15mを測る。埋土は灰色(10Y6/1)細粒砂混粘土、灰色(5Y5/1)粘土質シルトで、13世紀前半の土師器小皿・瓦器椀などが出土した。

遺構に伴わない出土遺物

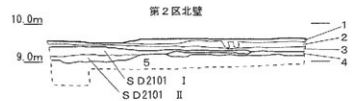
３層からは土師器、瓦器、白磁などの細片が、４層からは土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器などの細片が出土した。この内３層から出土した６点(12～17)、４層から出土した13点(18～30)を図化した。12は土師器小皿である。13～16は瓦器椀である。14は内外面にヘラミガキを施す。15は見込みに斜格子状暗文を施す。12世紀代に比定できる。17は12世紀代に比定できる白磁碗である。18・19は土師器中皿である。20は土師器小皿である。21～27は瓦器椀である。20・21は内外面にヘラミガキを施す。12世紀代に比定できる。25～27は見込みに平行線状の暗文を施し、13世紀代に比定できる。28は瓦器小皿である。29は瓦質甕である。30は須恵器杯蓋で、６～７世紀代に比定できる。

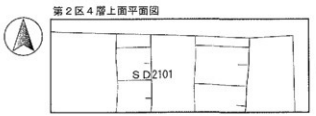


0：盛土・客土
1：暗オリーブ灰色(5GY3/1)粘土質シルト　旧作土層
2：にぶい黄褐色(10YR5/3)～にぶい黄色(2.5Y6/3)粘土質シルト　作土層
3：にぶい黄褐色(10YR5/4)粘土質シルト　中世の遺物包含層
4：にぶい黄橙色(10YR6/3)粘土質シルト　中世の遺物包含層
5：にぶい黄橙色(10YR6/4)～灰黄褐色(10YR4/2)粘土質シルト　河川堆積層

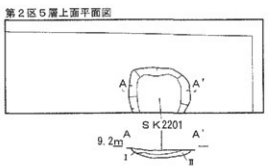
Ⅰ：暗灰色(N3/0)粘土質シルト

SK1201～SK1204　Ⅰ：褐色(10Y4/4)細粒砂混粘土(炭化物含む)
SP1201・SP1202　Ⅰ：灰色(10Y6/1)細粒砂混粘土
SP1203　Ⅰ：灰色(10Y6/1)細粒砂混粘土　Ⅱ：灰色(5Y5/1)粘土質シルト





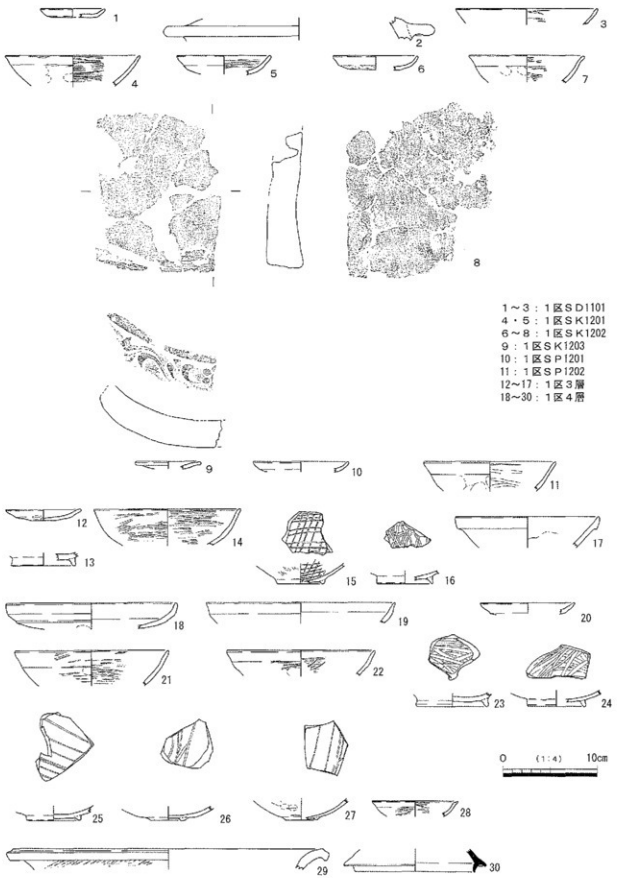
SD2101　Ⅰ：褐色(10YR3/4)細粒砂混粘土
SD2101　Ⅱ：黒褐色(10YR3/1)細粒砂混粘土



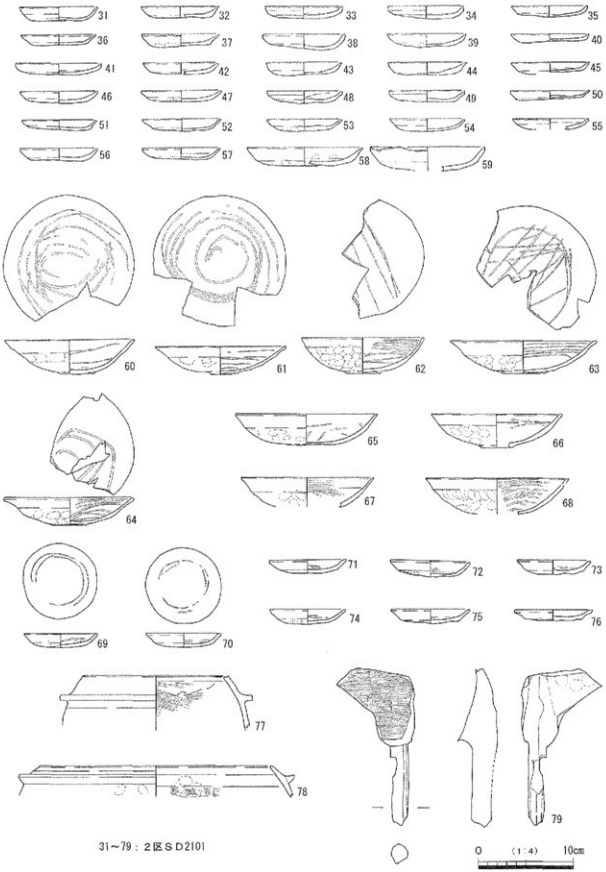
SK2201　Ⅰ：灰色(7.5YR4/2)細粒砂混粘土
SK2201　Ⅱ：褐色(7.5YR4/6)細粒砂混粘土(炭化物含む)

0　(1:100)　2m

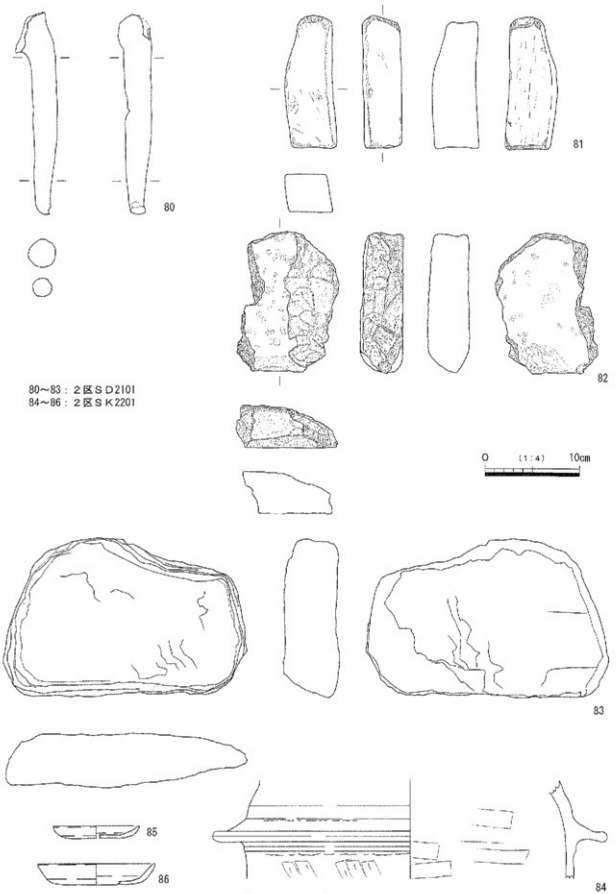
第３図　第１・２区　平・断面図


1～3：1区SD1101
4・5：1区SK1201
6～8：1区SK1202
9：1区SK1203
10：1区SP1201
11：1区SP1202
12～17：1区3層
18～30：1区4層
0　(1:4)　10cm

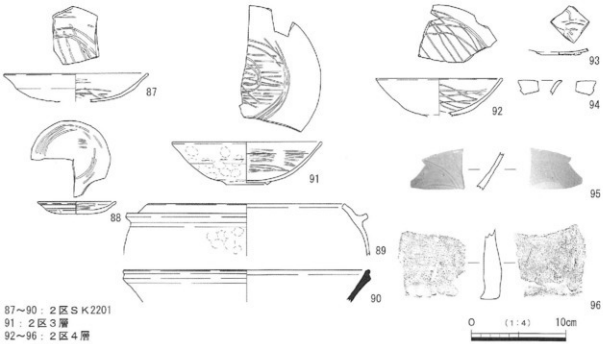
第４図　出土遺物実測図


31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
31～79：２区ＳＤ2101
0 (1:4) 10cm

第５図　出土遺物実測図



第６図　出土遺物実測図



第７図　出土遺物実測図

第２区

４層上面で鎌倉時代後期(13世紀後半)の溝１条(ＳＤ2101)、５層上面で鎌倉時代前期(13世紀前半)の土坑１基(ＳＫ2201)を検出した。

ＳＤ2101

第２区の西部で検出した。南北方向に直線に伸びる溝で、西の肩は調査区外に至る。幅5.2m以上、深さ0.4mを測る。埋土は上から褐色(10YR3/4)細粒砂混粘土、黒褐色(10YR3/1)細粒砂混粘土で、土師器小皿、瓦器椀、瓦質土器羽釜などが多数出土した。この内53点(31～83)を図化した。31～57は土師器小皿である。31～46の色調は褐色、47～57の色調は白色である。58・59は土師器中皿である。60～68は瓦器椀である。見込みに暗文を施し、退化している高台が貼り付く。69～76は瓦器小皿である。77は土師器羽釜である。78～80は瓦質土器羽釜である。81は砥石である。82・83は用途不明の石である。これらの遺物は13世紀後半に比定される。

ＳＫ2201

第２区で検出した。南側は調査区外に至るため平面形状および規模は不明である。検出した部分では、東西1.6m、南北1.2m、深さ0.25mを測る。埋土は上から灰褐色(7.5YR4/2)細粒砂混粘土、褐色(7.5YR4/6)細粒砂混粘土(炭化物を多く含む)で、13世紀前半の土師器中皿・小皿・羽釜、瓦器椀・小皿、瓦質土器羽釜などが出土した。この内７点(84～90)を図化した。84は土師器羽釜である。85は土師器小皿である。86は土師器中皿である。87は瓦器椀である。88は瓦器小皿である。89は瓦質羽釜である。90は須恵器鉢である。

遺構に伴わない出土遺物

３層からは土師器、瓦器、白磁などの細片が、４層からは土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器などの細片が出土した。この内３層から出土した１点(91)、４層から出土した５点(92～96)を図化

した。91は12世紀末の瓦器椀である。92・93は12世紀末～13世紀前半の瓦器椀である。94・95は12世紀代に比定できる白磁碗である。95は12世紀に比定できる青磁碗である。96は古墳時代中～後期に比定できる円筒埴輪の底部である。

出土遺物の詳細は表１にまとめ記載した。

表１　出土遺物観察表

遺物番号 図版番号	地区	遺構・層	種類	器種	部位	形態・調整	色調	胎土	焼成	備考
1	第１区	ＳＤ1101	土師器	小皿	口縁～底部	口縁部は屈曲し外上方へ直線的に延びる。底部は平らである。口縁部および体部の内外面はナデである。	内外面－7.5YR7/3 にぶい橙色	１㎜程度の砂粒を含む	良好	
2	第１区	ＳＤ1101	土師器	羽釜	鍔部	鍔部は水平に外へ延びる。鍔部および体部の内外面はナデである。	内面－7.5YR8/3 浅黄橙色 鍔部上面－7.5YR7/2 明褐灰色 鍔部下面－5YR/7/6 橙色	２㎜程度の砂粒を含む	やや不良	
3	第１区	ＳＤ1101	瓦器	椀	口縁部	体部は外上方へ内湾し延びる。口縁部は丸く終る。口縁部の内外面はヨコナデ、体部の内面はヘラミガキ、外面はナデである。	内外面－N4/0 灰色	１㎜程度の砂粒を含む	良好	
4	第１区	ＳＫ1201	瓦器	椀	口縁部	体部は外上方へ内湾し延びる。口縁部は丸く終る。口縁部の内外面はヘラミガキ、体部の内面はヘラミガキ、外面はユビナデである。	内外面－10GY2/1 緑黒色	１㎜程度の砂粒を含む	良好	
5	第１区	ＳＫ1201	瓦器	小皿	口縁部	口縁部は屈曲し外上方へ内湾し延びる。口縁部の内外面はヨコナデ、体部の内面はヘラミガキ、外面はナデである。	内面－7.5Y8/1 灰白色 外面－5Y8/1 灰白色	１㎜程度の砂粒を含む	良好	
6	第１区	ＳＫ1202	土師器	小皿	口縁部	口縁部は屈曲し外上方へ内湾し延びる。底部は平らである。口縁部の内外面はヨコナデ、体部の内外面はナデである。	内外面－7.5Y3/2 オリーブ黒色	１㎜程度の砂粒を含む	良好	
7	第１区	ＳＫ1202	瓦器	椀	口縁部	体部は外上方へ内湾し延びる。口縁部は外反し丸く終る。口縁部の内外面はヨコナデ、体部の内面はヘラミガキ、外面はユビナデである。	内外面－N4/0 灰色	１㎜程度の砂粒を含む	良好	
8 3	第１区	ＳＫ1202	瓦	軒平瓦		瓦当面に唐草文を施す。凹面は布目圧痕、凸面は縦方向ナデである。	凹面－7.5Y4/1 灰色 凸面－10Y6/1 灰色	１㎜程度の砂粒を含む	良好	類例－松原市立部遺跡、軒平瓦、平安時代後期
9	第１区	ＳＫ1203	土師器	小皿	口縁部	口縁部は緩やかに屈曲し外上方へ直線的に延びる。端部は上方へ丸くつまみ出す。底部は平らである。口縁部および体部の内外面はナデである。	内外面－7.5YR8/3 浅黄橙色	１㎜程度の砂粒を含む	良好	
10	第１区	ＳＰ1201	土師器	小皿	口縁部	口縁部は外上方へ内湾し延びる。底部は平らである。口縁部および体部の内外面はナデである。	内外面－10YR7/4 にぶい黄橙色	１㎜程度の砂粒を含む	良好	
11	第１区	ＳＰ1202	瓦器	椀	口縁部	体部は外上方へ内湾し延びる。口縁部はやや外反し丸く終る。口縁部の内外面はヨコナデ、体部の内面はヘラミガキ、外面はユビナデである。	内面－10Y4/1 灰色 外面－N4/0 灰色	１㎜程度の砂粒を含む	良好	
12	第１区	３層	土師器	小皿	口縁～底部	口縁部は外上方へ内湾し延びる。底部は平らである。口縁部および体部の内外面はナデである。	内面－7.5YR8/4 浅黄橙色 外面－10YR8/3 浅黄橙色	１㎜程度の砂粒を含む	良好	
13	第１区	３層	瓦器	椀	高台部	底部には「ハ」の字に開く高台が貼り付く。底部の内面はヘラミガキ、外面はナデ、高台部の内外面はナデである。	内面－5Y65/1 灰色 外面－5Y6/1 灰色	１㎜程度の砂粒を含む	良好	
14	第１区	３層	瓦器	椀	口縁部	体部は外上方へ内湾し延びる。口縁部はやや外反し丸く終る。口縁部の内外面はヘラミガキのちヨコナデ、体部の内外面はヘラミガキである。	内外面－N3/0 暗灰色	１㎜程度の砂粒を含む	良好	
15	第１区	３層	瓦器	椀	高台部	底部には「ハ」の字に開く高台が貼り付く。底部の内面はヘラミガキ、外面はナデ、高台部の内外面はナデである。	内面－5Y65/1 灰色 外面－5Y6/1 灰色	１㎜程度の砂粒を含む	良好	
16	第１区	３層	瓦器	椀	高台部	底部には「ハ」の字に開く高台が貼り付く。底部の内面はヘラミガキで、格子状暗文を施す。外面はナデ、高台部の内外面はナデである。	内面－5Y6/1 灰色 外面－5Y4/1 灰色	１㎜程度の砂粒を含む	良好	内面－黒斑
16	第１区	３層	瓦器	椀	高台部	底部には「ハ」の字に開く高台が貼り付く。底部の内面はヘラミガキ、外面はナデ、高台部の内外面はナデである。	内外面－N4/0 灰色	１㎜程度の砂粒を含む	良好	
17 3	第１区	３層	白磁	碗	口縁部	体部は外上方に直線的に延びる。口縁部は外へ拡張する。全体的に釉がかかる。	内外面－7.5Y8/2 灰白色	緻密	良好	
18	第１区	４層	土師器	中皿	口縁部	口縁部は緩やかに曲り外上方へ内湾し延びる。底部は平らである。口縁部および体部の内外面はナデである。	内面－10YR7/4 にぶい黄橙色 外面－10YR8/3 浅黄橙色	１㎜程度の砂粒を含む	良好	内面－口縁端部黒斑
19	第１区	４層	土師器	中皿	口縁部	口縁部は屈曲し外上方へ直線的に延びる。口縁部の内外面はナデである。	内外面－10YR8/4 浅黄橙色	１㎜程度の砂粒を含む	良好	
20	第１区	４層	土師器	小皿	口縁部	口縁部は屈曲し外上方へ直線的に延びる。底部は平らである。口縁部および体部の内外面はナデである。	内外面－10YR6/3 にぶい黄橙色	１㎜程度の砂粒を含む	良好	
21	第１区	４層	瓦器	椀	口縁部	体部は外上方へ内湾し延びる。口縁部はやや外反し丸く終る。口縁部の内外面はヘラミガキのちヨコナデ、体部の内外面はヘラミガキである。	内外面－N4/0 灰色	１㎜程度の砂粒を含む	良好	
22	第１区	４層	瓦器	椀	口縁部	体部は外上方へ直線的に延びる。口縁部はやや外反し丸く終る。口縁部の内外面はヘラミガキのちヨコナデ、体部の内外面はヘラミガキである。	内外面－10Y5/1 灰色	１㎜程度の砂粒を含む	良好	口縁端部－黒い

遺物番号 図版番号	地区	遺構・層	種類	器種	部位	形態・調整	色調	胎土	焼成	備考
23	第1区	4層	瓦器	椀	高台部	底部には「ハ」の字に開く高台が貼り付く。底部の内面はヘラミガキで、外面はナデ、高台部の内外面はナデである。	内面－10Y5/1灰色 外面－10GY3/1暗緑灰色	1㎜程度の砂粒を含む	やや不良	
24	第1区	4層	瓦器	椀	高台部	底部には「ハ」の字に開く高台が貼り付く。底部の内面はヘラミガキで、外面はナデ、高台部の内外面はナデである。	内面－2.5YR8/2灰白色 外面－10YR8/3浅黄橙色	1㎜程度の砂粒を含む	不良	
25	第1区	4層	瓦器	椀	高台部	底部には「ハ」の字に開く高台が貼り付く。底部の内面はヘラミガキで平行線状暗文を施す。外面はナデ、高台部の内外面はナデである。	内外面－10Y3/1オリーブ黒色	1㎜程度の砂粒を含む	やや不良	
26	第1区	4層	瓦器	椀	高台部	底部には「ハ」の字に開く高台が貼り付く。底部の内面はヘラミガキで平行線状暗文を施す。外面はナデ、高台部の内外面はナデである。	内外面－N4/0灰色	1㎜程度の砂粒を含む	良好	
27	第1区	4層	瓦器	椀	高台部	底部には「ハ」の字に開く断面三角形の高台が貼り付く。底部の内面はヘラミガキで平行線状暗文を施す。外面はナデ、高台部の内外面はナデである。	内外面－5Y7/1灰白色	1㎜程度の砂粒を含む	やや不良	
28	第1区	4層	瓦器	小皿	口縁部	口縁部は外反する。口縁部の内外面はヨコナデ、体部の内外面はヘラミガキである。	内外面－5B4/1暗青灰色	1㎜程度の砂粒を含む	良好	
29	第1区	4層	瓦質土器	甕	口縁部	口縁部は外反する。口縁部の内外面はヨコナデ、体部の内面はナデ、外面はタタキ後ナデである。	内外面－10Y3/1オリーブ黒色	1～3㎜程度の砂粒を含む	やや不良	
30	第1区	4層	須恵器	杯蓋	口縁部	天井部に丸みがある。かえりは下外方へ短く延びる。口縁部および体部の内外面は回転ナデである。	内外面－10Y5/1灰色	1㎜程度の砂粒を含む	良好	
31	第2区	SD2101	土師器	小皿	口縁部～底部	口縁部は緩やかに曲り外上方へ内湾し延びる。底部は上げ底であるが、凹凸分が若干ある。口縁部および体部の内外面はナデである。	内外面－10YR7/3にぶい黄橙色	1㎜程度の砂粒を含む	良好	褐色系
32	第2区	SD2101	土師器	小皿	ほぼ完形	口縁部は屈曲し外上方へ直線的に延びる。底部は平らである。口縁部および体部の内外面はナデである。	内外面－7.5YR6/4にぶい橙色	1㎜程度の砂粒を含む	良好	褐色系
33 3	第2区	SD2101	土師器	小皿	完形	口縁部は緩やかに曲り、上方へ直線的短く延びる。端部は尖りぎみに終る。底部は平らである。口縁部および体部の内外面はナデである。	内面－10YR7/4にぶい黄橙色 外面－10YR7/2にぶい黄橙色	1㎜程度の砂粒を含む	良好	褐色系
34 3	第2区	SD2101	土師器	小皿	完形	口縁部は緩やかに曲り、上方へ直線的短く延びる。端部は尖りぎみに終る。底部は平らである。口縁部および体部の内外面はナデである。	内面－2.5Y8/4淡黄色 外面－10YR7/3にぶい黄橙色	1㎜程度の砂粒を含む	良好	褐色系
35	第2区	SD2101	土師器	小皿	完形	口縁部は屈曲し外上方へ直線的に延びる。底部は平らである。口縁部および体部の内外面はナデである。	内面－10YR7/4にぶい黄橙色 外面－10YR7/2にぶい黄橙色	1㎜程度の砂粒を含む	良好	褐色系
36	第2区	SD2101	土師器	小皿	ほぼ完形	口縁部は屈曲し外上方へ直線的に延びる。底部は平らである。口縁部および体部の内外面はナデである。	内面－10YR8/4浅黄橙色 外面－10YR7/2にぶい黄橙色	1㎜程度の砂粒を含む	良好	褐色系
37 3	第2区	SD2101	土師器	小皿	完形	口縁部は屈曲し外上方へ直線的に延びる。端部はやや内湾し丸く終る。底部は平らである。口縁部および体部の内外面はナデである。	内面－10YR8/2灰白色 外面－7.5YR7/4にぶい橙色	1㎜程度の砂粒を含む	良好	褐色系
38 3	第2区	SD2101	土師器	小皿	完形	口縁部は緩やかに曲り外上方へ内湾し延びる。底部は平らであるが、凹凸部分が若干ある。口縁部および体部の内外面はナデである。	内面－10YR7/4にぶい黄橙色 外面－2.5Y7/2灰黄色	1㎜程度の砂粒を含む	良好	褐色系
39 3	第2区	SD2101	土師器	小皿	完形	口縁部は緩やかに曲り外上方へ内湾し延びる。底部は平らであるが、やや凹凸がある。口縁部および体部の内外面はナデである。	内面－2.5Y7/2灰黄色 外面－10YR7/3にぶい黄橙色	1㎜程度の砂粒を含む	やや不良	褐色系
40	第2区	SD2101	土師器	小皿	半分	口縁部は屈曲し、上方へ直線的短く延びる。端部は尖りぎみに丸く終る。底部は平らである。口縁部および体部の内外面はナデである。	内面－10YR7/4にぶい黄橙色 外面－2.5Y7/3浅黄色	1㎜程度の砂粒を含む	良好	褐色系
41	第2区	SD2101	土師器	小皿	半分	口縁部は屈曲し、上方へ直線的短く延びる。端部は尖りぎみに丸く終る。底部は平らであるが、凹凸部分が若干ある。口縁部および体部の内外面はナデである。	内面－10YR8/4浅黄橙色 外面－2.5Y7/2灰黄色	1㎜程度の砂粒を含む	良好	褐色系
42	第2区	SD2101	土師器	小皿	口縁～底部	口縁部は緩やかに曲り外上方へ直線的に延びる。底部は平らである。口縁部および体部の内外面はナデである。	内面－10YR7/4にぶい黄橙色 外面－2.55Y7/2灰黄色	1㎜程度の砂粒を含む	良好	褐色系
43	第2区	SD2101	土師器	小皿	完形	口縁部は緩やかに曲り外上方へ内湾し延びる。底部は平らである。口縁部および体部の内外面はナデである。	内面－7.5YR7/4にぶい橙色 外面－10YR7/4にぶい黄橙色	1㎜程度の砂粒を含む	良好	褐色系
44	第2区	SD2101	土師器	小皿	完形	口縁部は緩やかに曲り外上方へ直線的に延びる。底部は平らである。口縁部および体部の内外面はナデである。	内外面－7.5YR7/4にぶい橙色	1㎜程度の砂粒を含む	良好	褐色系
45	第2区	SD2101	土師器	小皿	ほぼ完形	口縁部は屈曲し外上方へ直線的に延びる。底部は平らである。口縁部および体部の内外面はナデである。	内面－10YR7/3にぶい黄橙色 外面－2.5Y7/3浅黄色	1㎜程度の砂粒を含む	良好	褐色系
46	第2区	SD2101	土師器	小皿	完形	口縁部は屈曲し外上方へ直線的に延びる。底部は平らである。口縁部および体部の内外面はナデである。	内外面－7.5YR7/4にぶい橙色	1㎜程度の砂粒を含む	良好	褐色系
47	第2区	SD2101	土師器	小皿	口縁～底部	口縁部は屈曲し外上方へ直線的に延びる。底部は平らである。口縁部および体部の内外面はナデである。	内外面－10YR8/3浅黄橙色	1㎜程度の砂粒を含む	良好	白色系
48	第2区	SD2101	土師器	小皿	完形	口縁部は緩やかに曲り外上方へ内湾し延びる。底部は平らであるが、凹凸部分が若干ある。口縁部および体部の内外面はナデである。	内外面－2.5Y8/2灰白色	1㎜程度の砂粒を含む	良好	白色系
49	第2区	SD2101	土師器	小皿	完形	口縁部は屈曲し外上方へ直線的に延びる。底部は平らである。口縁部および体部の内外面はナデである。	内外面－2.5Y8/2灰白色	1㎜程度の砂粒を含む	良好	白色系
50 3	第2区	SD2101	土師器	小皿	完形	口縁部は屈曲し外上方へ外反し延びる。底部は平らであるが、凹凸部分が若干ある。口縁部および体部の内外面はナデである。	内外面－10YR8/2灰白色	1㎜程度の砂粒を含む	良好	白色系

遺物番号 図版番号	地区	遺構・層	種類	器種	部位	形態・調整	色調	胎土	焼成	備考
51	第２区	ＳD2101	土師器	小皿	ほぼ完形	口縁部は屈曲し外上方へ直線的に延びる。底部は平らである。口縁部および体部の内外面はナデである。	内外面－10YR8/1 灰白色	１㎜程度の砂粒を含む	良好	白色系
52 3	第２区	ＳD2101	土師器	小皿	完形	口縁部は屈曲し外上方へ外反し延びる。底部は平らであるが、凹凸部分が若干ある。口縁部および体部の内外面はナデである。	内外面－2.5Y8/1 灰白色	１㎜程度の砂粒を含む	良好	白色系
53	第２区	ＳD2101	土師器	小皿	完形	口縁部は屈曲し外上方へ直線的に延びる。端部はやや内湾し丸く終る。底部は平らである。口縁部および体部の内外面はナデである。	内外面－2.5Y8/1 灰白色	１㎜程度の砂粒を含む	良好	白色系
54 3	第２区	ＳD2101	土師器	小皿	完形	口縁部は屈曲し外上方へ外反し延びる。底部は平らである。口縁部および体部の内外面はナデである。	内外面－2.5Y8/1 灰白色	１㎜程度の砂粒を含む	良好	白色系
55	第２区	ＳD2101	土師器	小皿	口縁部	口縁部は緩やかに曲り外上方へ内湾し延びる。底部は平らである。口縁部および体部の内外面はナデである。	内外面－2.5Y8/2 灰白色	１㎜程度の砂粒を含む	良好	白色系
56	第２区	ＳD2101	土師器	小皿	口縁～底部	口縁部は屈曲し、外上方へ直線的に延びる。底部は平らである。口縁部および体部の内外面はナデである。	内面－2.5Y8/1灰白色 外面－10YR8/3浅黄橙色	１㎜程度の砂粒を含む	良好	白色系
57 3	第２区	ＳD2101	土師器	小皿	完形	口縁部は屈曲し、外上方へ直線的に延びる。底部は平らである。口縁部および体部の内外面はナデである。	内面－10YR8/2灰白色 外面－2.5Y8/1灰白色	１㎜程度の砂粒を含む	良好	白色系
58	第２区	ＳD2101	土師器	中皿	半分	口縁部は緩やかに曲り外上方へ内湾し延びる。底部は平らであるが、凹凸部分が若干ある。口縁部および体部の内外面はナデである。	内面－10YR7/4にぶい黄橙色 外面－7.5YR7/4にぶい橙色	１㎜程度の砂粒を含む	良好	
59	第２区	ＳD2101	土師器	中皿	口縁～底部	口縁部は緩やかに曲り外上方へ内湾し延びる。口縁部は凹凸がある。底部は平らである。口縁部および体部の内外面はナデである。	内外面－10YR7/3 にぶい黄橙色	１～３㎜程度の砂粒を含む	良好	
60	第２区	ＳD2101	瓦器	椀	ほぼ完形	体部は外上方へ内湾し延びる。口縁部はやや外反し丸く終る。底部には低い高台が貼り付く。口縁部の内外面はヨコナデである。体部の内面はヘラミガキ、外面はユビナデである。内面に螺旋状の暗文を施す。	内面－10Y8/1灰白色 外面－N5/0灰色	１～２㎜程度の砂粒を含む	良好	
61 3	第２区	ＳD2101	瓦器	椀	ほぼ完形	体部は外上方へ内湾し延びる。口縁部はやや外反し丸く終る。底部の外面には低い高台が貼り付く。口縁部の内外面はヨコナデである。体部の内面はヘラミガキ、外面はユビナデである。内面に螺旋状の暗文を施す。	内外面－10Y5/1灰色	１～２㎜程度の砂粒を含む	良好	
62	第２区	ＳD2101	瓦器	椀	口縁～高台部	体部は外上方へ内湾し延びる。口縁部は丸く終る。底部の外面には低い高台が貼り付く。口縁部の内外面はヨコナデである。体部の内面はヘラミガキ、外面はユビナデである。内面に平行線状の暗文を施す。	内面－10Y5/1灰色 外面－10Y4/1灰色	１～２㎜程度の砂粒を含む	良好	
63	第２区	ＳD2101	瓦器	椀	口縁～高台部	体部は外上方へ内湾し延びる。口縁部はやや外反し丸く終る。底部の外面には低い高台が貼り付く。口縁部の内外面はヨコナデである。体部の内面はヘラミガキ、外面はユビナデである。内面に平行線状の暗文を施す。	内面－N4/0灰色 外面－5B3/1暗青灰色	１～２㎜程度の砂粒を含む	良好	
64	第２区	ＳD2101	瓦器	椀	半分	体部は外上方へ内湾し延びる。口縁部はやや外反し丸く終る。底部の外面には低い高台が貼り付く。口縁部の内外面はヨコナデである。体部の内面はヘラミガキ、外面はユビナデである。内面に平行線状の暗文を施す。	内外面－10BG2/1 青黒色	１～２㎜程度の砂粒を含む	良好	
65	第２区	ＳD2101	瓦器	椀	口縁～高台部	体部は外上方へ内湾し延びる。口縁部はやや外反し丸く終る。底部の外面には低い高台が貼り付く。口縁部の内外面はヨコナデである。体部の内面はヘラミガキ、外面はユビナデである。内面に平行線状の暗文を施す。	内面－10Y7/1灰白色 外面－7.5Y7/1灰白色	１～２㎜程度の砂粒を含む	良好	
66	第２区	ＳD2101	瓦器	椀	口縁～高台部	体部は外上方へ内湾し延びる。口縁部はやや外反し丸く終る。底部の外面には低い高台が貼り付く。口縁部の内外面はヨコナデである。体部の内面はヘラミガキ、外面はユビナデである。	内面－N5/0灰色 外面－10Y6/1灰色	１㎜程度の砂粒を含む	良好	外面－黒斑
67	第２区	ＳD2101	瓦器	椀	口縁部	体部は外上方へ内湾し延びる。口縁部はやや外反し丸く終る。口縁部の内外面はヨコナデである。体部の内面はヘラミガキ、外面はユビナデである。	内面－2.5Y7/2灰黄色 外面－2.5Y7/1灰白色	１㎜程度の砂粒を含む	良好	内外面－黒斑
68	第２区	ＳD2101	瓦器	椀	口縁部	体部は外上方へ内湾し延びる。口縁部はやや外反し丸く終る。口縁部の内外面はヨコナデである。体部の内面はヘラミガキ、外面はユビナデである。	内面－N4/0灰色 外面－10Y7/1灰白色	１㎜程度の砂粒を含む	良好	
69 3	第２区	ＳD2101	瓦器	小皿	完形	口縁部は屈曲し外上方へ直線的に延びる。口縁部の内外面はヨコナデ、体部の内面はヘラミガキ、外面はユビナデである。内面に螺旋状の暗文を施す。	内外面－N5/0灰色	１㎜程度の砂粒を含む	良好	
70 3	第２区	ＳD2101	瓦器	小皿	完形	口縁部は屈曲し外上方へ直線的に延びる。口縁部の内外面はヨコナデ、体部の内面はヘラミガキ、外面はユビナデである。内面に螺旋状の暗文を施す。	内外面－N3/0暗灰色	１㎜程度の砂粒を含む	良好	
71	第２区	ＳD2101	瓦器	小皿	完形	口縁部は緩やかに曲り外上方へ直線的に延びる。口縁部の内外面はヨコナデ、体部の内外面はヘラミガキである。	内面－2.5GY4/1暗オリーブ灰色 外面－10GY2/1緑黒色	１㎜程度の砂粒を含む	良好	
72	第２区	ＳD2101	瓦器	小皿	完形	口縁部は緩やかに曲り外上方へ直線的に延びる。口縁部の内外面はヨコナデ、体部の内外面はヘラミガキである。	内外面－N4/0灰色	１㎜程度の砂粒を含む	不良	
73	第２区	ＳD2101	瓦器	小皿	完形	口縁部は緩やかに曲り外上方へ直線的に延びる。口縁部の内外面はヨコナデ、体部の内外面はヘラミガキである。	内面－10Y6/1灰色 外面－N4/0灰色	１㎜程度の砂粒を含む	良好	
74	第２区	ＳD2101	瓦器	小皿	完形	口縁部は緩やかに曲り外上方へ直線的に延びる。口縁部の内外面はヨコナデ、体部の内外面はヘラミガキである。	内面－10Y5/1灰色 外面－N5/1灰色	１㎜程度の砂粒を含む	良好	
75	第２区	ＳD2101	瓦器	小皿	完形	口縁部は屈曲し外上方へ直線的に延びる。口縁部の内外面はヨコナデ、体部の内外面はユビナデである。	内外面－N5/0灰色	１㎜程度の砂粒を含む	良好	
76	第２区	ＳD2101	瓦器	小皿	口縁～底部	口縁部は屈曲し外上方へ直線的に延びる。口縁部の内外面はヨコナデ、体部の内外面はユビナデである。	内外面－10Y4/1灰色	１㎜程度の砂粒を含む	良好	

遺物番号 図版番号	地区	遺構・層	種類	器種	部位	形態・調整	色調	胎土	焼成	備考
77	第2区	ＳＤ2101	瓦質土器	羽釜	口縁～鍔部	体部は内湾し、口縁端部は面を形成する。体部の上位に水平に延びる鍔が貼り付く。口縁部の内外面はヨコナデ、体部の内面はハケナデ、外面はナデである。鍔部はヨコナデである。	内面－10Y6/1灰色 外面－N4/0灰色	1～2㎜程度の砂粒を含む	良好	外面－下半煤付着
78	第2区	ＳＤ2101	瓦質土器	羽釜	口縁～鍔部	体部は内湾し、口縁端部は丸く終わる。体部の上位に外上方に延びる鍔が貼り付く。口縁部の内外面はヨコナデ、体部の内面はハケナデ、外面はナデである。鍔部はヨコナデである。	内面－2.5Y7/1灰白色 外面－2.5Y4/1黄灰色	1㎜程度の砂粒を含む	良好	外面－下半煤付着
79	第2区	ＳＤ2101	瓦質土器	三足羽釜	脚部	脚部は垂直に延びる。体部の内面はハケナデ、外面はユビナデ，脚部はナデである。	内外面－10Y4/1灰色	1～2㎜程度の砂粒を含む	良好	
80	第2区	ＳＤ2101	瓦質土器	三足羽釜	脚部	脚部は垂直に延びる。脚部はナデである。	内外面－10GY4/1暗緑灰色	1～2㎜程度の砂粒を含む	やや不良	
81	第2区	ＳＤ2101	石	砥石		形状は長方形で、４面に使用した痕跡がある。	5G7/1明緑灰色			
82	第2区	ＳＤ2101	石	用途不明		形状は板状の不定形である。平らな面が２面にある。焼けており，黒く焦げ煤が付着している。	N2/0黒色			焼けている
83	第2区	ＳＤ2101	石	用途不明		形状は板状の台形形である。平らな面が２面にある。全体的に焼けており、煤が付着している部分がある。	N2/0黒色			全体にやけており、煤付着
84	第2区	ＳＫ2201	土師器	羽釜	鍔部	体部は内湾する。体部の上位に水平に延びる鍔が貼り付く。体部の内面は板状工具によるナデ、外面は鍔より上部がナデ、下部がヘラケズリである。鍔部はヨコナデである。	内面－7.5YR7/6橙色 外面－10YR8/4浅黄橙色	1～4㎜程度の砂粒を含む	やや不良	内外面－鍔より下部に煤付着
85	第2区	ＳＫ2201	土師器	小皿	口縁～底部	口縁部は緩やかに曲り外上方へ直線的に延びる。底部は平らである。口縁部および体部の内外面はナデである。	内外面－10YR7/4にぶい黄橙色	1㎜程度の砂粒を含む	良好	褐色系
86	第2区	ＳＫ2201	土師器	中皿	口縁～底部	口縁部は緩やかに曲り外上方へ直線的に延びる。底部は平らである。口縁部および体部の内外面はナデである。	内外面－10YR7/4にぶい黄橙色	1㎜程度の砂粒を含む	良好	
87	第2区	ＳＫ2201	瓦器	椀	口縁部	体部は外上方へ内湾し延びる。口縁部はやや外反し丸く終る。底部には低い高台が貼り付く。口縁部の内外面はヨコナデである。体部の内面はヘラミガキ、外面はユビナデである。内面に平行線状の暗文を施す。	内面－10Y5/1灰色 外面－N5/1灰色	1㎜程度の砂粒を含む	良好	
88	第2区	ＳＫ2201	瓦器	小皿	ほぼ完形	口縁部は屈曲し外上方へ直線的に延びる。口縁部の内外面はヨコナデ、体部の内面はヘラミガキ、外面はユビナデである。	内面－N3/0暗灰色 外面－N4/0灰色	1㎜程度の砂粒を含む	良好	
89	第2区	ＳＫ2201	瓦質土器	羽釜	口縁～鍔部	体部は内湾し、口縁端部は面を形成する。体部の上位に外上方に延びる鍔が貼り付く。口縁部の内外面はヨコナデ、体部の内外面はナデである。鍔部はヨコナデである。	内面－N4/0灰色 外面－5B1.7/1青黒色	1㎜程度の砂粒を含む	良好	
90	第2区	ＳＫ2201	須恵器	鉢	口縁部	体部は外上方へ直線的に延びる。口縁部は面を形成し、凹線状のくぼみを持つ。	内外面－7.5Y6/1灰色 外面口縁部－N5/0灰色	1㎜程度の砂粒を含む	良好	
91	第2区	3層東側溝	瓦器	椀	口縁～高台部	体部は外上方へ内湾し延びる。口縁部はやや外反し丸く終る。底部には低い高台が貼り付く。口縁部の内外面はヨコナデである。体部の内面はヘラミガキ、外面はユビナデである。内面に螺旋状と平行線状の暗文を施す。	内外面－10BG2/1青黒色	1㎜程度の砂粒を含む	良好	
92	第2区	4層	瓦器	椀	口縁部	体部は外上方へ内湾し延びる。口縁部はやや外反し丸く終る。底部には低い高台が貼り付く。口縁部の内外面はヨコナデである。体部の内面はヘラミガキ、外面はユビナデである。内面に平行線状の暗文を施す。	内外面－N4/0灰色	1㎜程度の砂粒を含む	良好	
93	第2区	4層	瓦器	椀	高台部	底部には低い高台が貼り付く。底部の内面はヘラミガキで連結輪状の暗文を施す。外面はナデ、高台部の内外面はナデである。	内外面－N4/0灰色	1㎜程度の砂粒を含む	良好	
94 3	第2区	4層	白磁	碗	口縁部	口縁部は外反する。内外面に釉を塗布している。	内外面－2.5GY8/1灰白色	緻密	良好	
95	第2区	4層	青磁	碗	体部	内湾する体部である。内外面は劃花文様を施す。内外面に釉を施釉している。	釉－5Y6/3オリーブ黄色 胎土－2.5Y7/1灰白色	緻密	良好	
96 3	第2区	4層	埴輪	円筒埴輪	底部	底部は直立する。内面は横方向ハケ目のちナデ、外面は縦方向ハケ目のちナデである。底部内面端部は指おさえによる形成を行う。	内面－5YR5/6明赤褐色 外面－10YR7/6明黄褐色	1～4㎜程度の砂粒を含む	良好	

３．まとめ

今回の調査では、平安時代（11世紀後半）以前に堆積した５層の河川堆積層の上面で、平安時代後期（11世紀後半）の遺構や鎌倉時代前半（13世紀前半）の遺構を確認し、その上層の４層上面では鎌倉時代後期（13世紀後半）の遺構を確認した。また、４層の包含層からは、11～13世紀代の瓦器椀、土師器小皿などが出土した。これらの遺構・遺物は、遺跡範囲外（2012－240）の調査でも確認しており、本地は当該期の居住域であったことが明らかになった。

ＳＫ1202～1204は、平安時代後期（11世紀後半）の遺構で、各遺構の形状や規模は類似し、東西方向に2.3～2.5ｍの間隔で配置されていることから、柱穴の可能性も考えられ、何らかの構築物

が存在していた可能性が考えられる。

ＳＤ2101からは、鎌倉時代後期(13世紀後半)の瓦器、瓦質土器、土師器などの日常雑器が出土した。これらの土器は、溝としての機能が停止する頃に廃棄しており、この時期に居住域は廃絶したと考えられる。

以後、室町時代(14世紀)～現代に至るまでは作土層を確認し、付近一帯には、生産域が広がっていたことが判明した。

【参考文献】

・森本めぐみ　1998「４．植松南遺跡第１次調査(ＵＭＳ97－１)」『平成９年度財団法人八尾市文化財調査研究会事業報告』　財団法人八尾市文化財調査研究会
・成沼佳子　2000「２．植松南遺跡第２次調査(ＵＭＳ99－２)」『平成11年度財団法人八尾市文化財調査研究会事業報告』　財団法人八尾市文化財調査研究会
・市本芳三　2001「大阪地域の平安時代後期瓦の様相」『第４回摂河泉古代寺院フォーラム　中世寺院の幕開け－11・12世紀の寺院の考古学的研究-』摂河泉古代寺院研究会
・西村公助　2005「Ⅲ　太子堂遺跡第11次調査(ＴＳ2002－11)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告85』財団法人八尾市文化財調査研究会
・坪田真一　2012「Ⅹ　太子堂遺跡第14次調査(ＴＳ2011－14)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告136』財団法人八尾市文化財調査研究会
・穐口　薫　2014「36)遺跡範囲外(2012－240)の調査」『八尾市内遺跡平成25年度発掘調査報告書　八尾市文化財調査報告72　平成25年度国庫補助事業』八尾市教育委員会

図版1

調査地周辺（南西から）

第１区機械掘削（南西から）

第１区４層上面調査状況（西から）

第１区北壁０～５層（南西から）

第１区４層上面全景（東から）

第１区ＳＤ1101全景（南から）

第１区５層上面全景（東から）

第１区ＳＫ1201・1202、ＳＰ1201・1202全景（南から）

図版２

第２区機械掘削（東から）

第２区北壁０～５層（南西から）

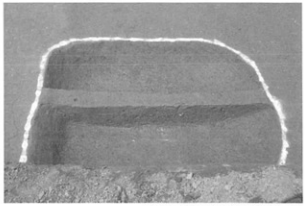
第２区ＳＤ2101遺物出土状況（西から）

第２区ＳＤ2101遺物出土状況（南から）

第２区ＳＤ2101調査状況（北西から）

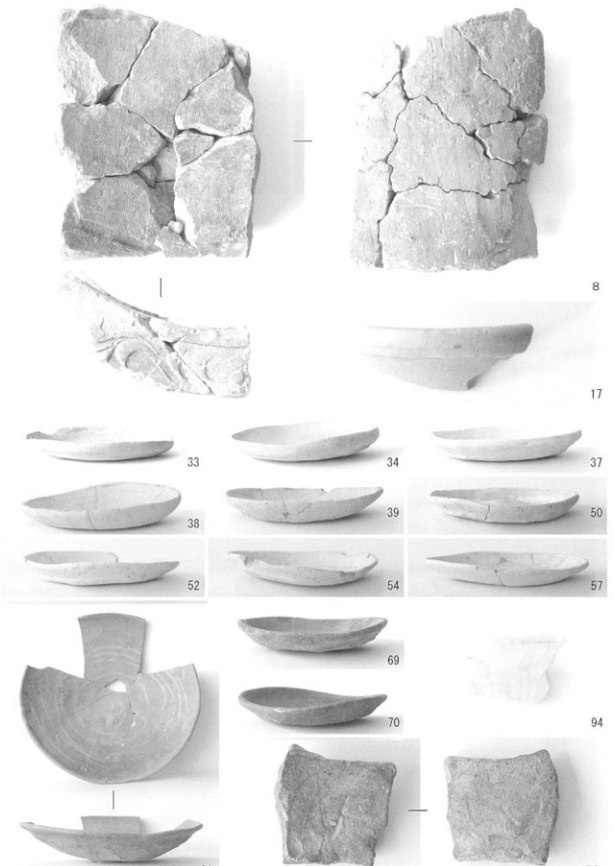
第２区４層上面全景（西から）

第２区５層上面全景（西から）



第２区ＳＫ2201全景（南から）

図版3



第１区ＳＫ1202(８)　第１区３層(17)　第２区ＳＤ2102(33～70)　第２区４層(94・96)

Ⅲ　成法寺遺跡第27次調査（ＳＨ2013－27）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市南本町二丁目53番１で実施した分譲住宅建設に伴う発掘調査報告書である。
1．本書で報告する成法寺遺跡第27次調査（ＳＨ2013－27）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財発掘調査指示書に基づくもので、申請者と公益財団法人八尾市文化財調査研究会の間で、八尾市教育委員会を立会者として締結した契約により、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が申請者から委託を受けて実施したものである。
1．調査は当調査研究会　坪田真一が担当した。
1．現地調査は、平成25年７月８日～７月10日（実働３日）に実施した。調査面積は約18.0㎡である。
1．現地調査には市森千恵子・伊藤静江・國津玲子が参加した。
1．内業整理は下記が行い、現地調査終了後に着手して平成28年３月31日をもって終了した。
　遺物実測－飯塚直世・市森・伊藤・國津・芝崎和美・竹田貴子・田島宣子・永井律子・村井俊子
　遺物トレース－市森
　遺物図版作成－垣内洋平
1．本書の執筆・編集は坪田が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……29
2．調査概要……30
　1）調査の方法と経過……30
　2）基本層序……30
　3）検出遺構と出土遺物……30
3．まとめ……37

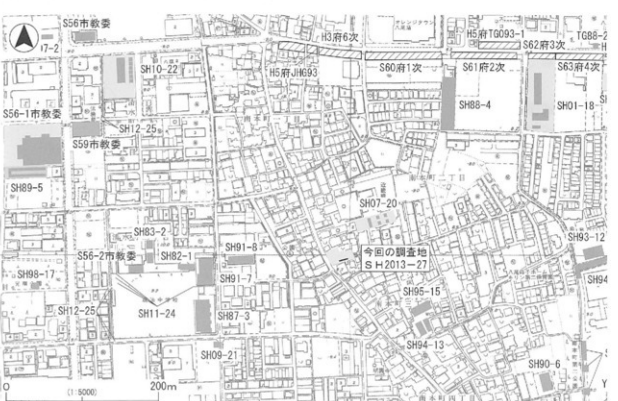
Ⅲ　成法寺遺跡第27次調査（ＳＨ2013－27）

１．はじめに

成法寺遺跡は八尾市のほぼ中央部に位置し、現在の行政区画では光南町一・二丁目、清水町一・二丁目、南本町一～四丁目、高美町一・二丁目、松山町一丁目、明美町一丁目、陽光園一丁目がその範囲とされ、東西約1.1km・南北約0.6kmに広がっている。地理的には旧大和川の主流である長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に立地している。周辺では北側で東郷遺跡・八尾寺内町、東側で小阪合遺跡、南側で矢作遺跡・龍華寺跡に隣接し、西側には長瀬川が北流している。

当遺跡は昭和56(1981)年５月、八尾市教育委員会が光南町一丁目29番で実施した試掘調査により確認された遺跡で、以降八尾市教育委員会・大阪府教育委員会・当調査研究会により多次にわたる発掘調査が行われている。これらの調査成果から、当遺跡は弥生時代中期からの遺跡であることが知られている。

今回の調査地は遺跡範囲のほぼ中央部に当り、周辺では西部で第７・８次調査（ＳＨ91－7、ＳＨ91－8）他、南東部で第13・15次調査（ＳＨ94－13、ＳＨ95－15）、北東部で第20次調査（ＳＨ2007－20）等を実施している。主な成果として第７・８次調査では奈良時代の掘立柱建物・井戸・溝等からなる居住域が確認され、第７次調査ではその下層で古墳時代前期の溝群を検出している。一方、遺跡内を南東－北西方向に縦断する自然堤防上に位置する第13・15・20次調査では、鎌倉時代～近世の集落遺構が密に検出されている。



第１図　調査地位置図

2．調査概要

1）調査の方法と経過

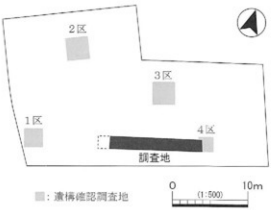
今回の調査は、平成25(2013)年６月24日に実施した遺構確認調査〈成法寺遺跡(2013－87)〉の結果を受けて行った分譲住宅建設に伴う調査で、当調査研究会が成法寺遺跡内で行った第27次調査(ＳＨ2013－27)である。

調査対象は下水管路部分で、平面形は東西12.0ｍ×南北1.5ｍ、面積約18㎡の長方形を呈する。

掘削は、現地表(約T.P.+9.5ｍ)下0.6～0.7ｍを機械掘削し、以下の約0.3ｍを人力掘削により調査を行った。また西端で検出した遺構についての詳細を確認するため、調査区を西に拡張した。

調査では、調査地西側道路上に位置する八尾市街区多角点10C69〈T.P.+9.361ｍ〉を標高の基準とした。

遺構名は遺構略号＋遺構番号とし、東から順に付した。



第２図　調査区位置図

2）基本層序

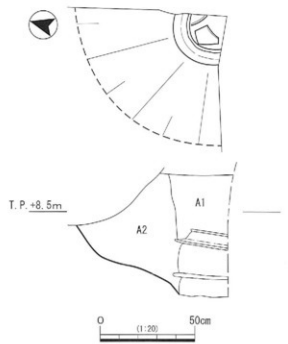
０層は現表土である。下面からの攪乱(ア層)は焼けた瓦礫や焼土の廃棄坑で、調査区西部・東部で見られた。１層や、北壁で見られた１層下面からのカ・キ層は近世以降の整地層である。キ層からは近世磁器が出土した。２層は近世以降の整地層である。３層は中世頃の整地層である。４層は水成層で、河川堆積層である。

3）検出遺構と出土遺物

４層上面(約T.P.+8.5～8.6ｍ)で、井戸３基(ＳＥ１～３)、土坑７基(ＳＫ１～７)、ピット１個(ＳＰ１)、溝１条(ＳＤ１)を検出した。このうちＳＥ２・３、ＳＫ６・７については３層上面～２層下面(約T.P.+8.7～8.8ｍ)の構築である。

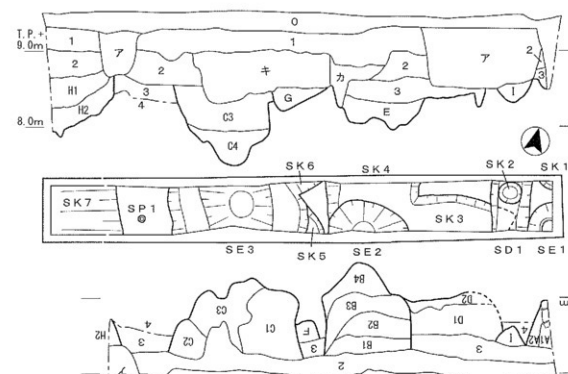
ＳＥ１

調査区南東角部に位置しており、井戸の北西部を検出した。掘方は円形を呈すると思われるが全容は不明である。検出部分の掘形規模は東西約0.7ｍ・南北約0.8ｍで、深さ約65㎝を測る。井戸枠に底部を欠いた土師器羽釜を使用するもので、検出面から約30㎝で検出した。羽釜は下から２段目までが遺存している他、３段目が南部で一部残存し



A1．2.5Y4/2暗灰黄色
　細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト　ブロック状
A2．5Y6/2灰オリーブ色
　シルト質粘土混細粒砂～粗粒砂　ブロック状

第３図　ＳＥ１平断面図



O．2.5Y7/3浅黄色細粒砂混粘土～シルト　表土
ア．焼土・焼けた瓦礫
1．10YR6/4にぶい黄橙色細粒砂～極粗粒砂混シルト　整地層
カ．5Y6/1灰色細粒砂～粗粒砂混シルトブロック状　整地層
キ．10YR5/4にぶい黄褐色極細粒砂～極粗粒砂混シルト　整地層
2．2.5Y6/2灰黄色細粒砂～極粗粒砂混シルト　整地層
3．2.5Y7/2灰黄色極細粒砂～細粒砂混シルト　整地層
4．2.5Y7/4浅黄色シルト～細粒砂互層　氷成層

SK1
2.5Y7/2灰黄色極細粒砂～細粒砂混シルト
SK2
2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂～粗粒砂多混粘土質シルト
SK3
D1．2.5Y5/1黄灰色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土　ブロック状
D2．2.5Y6/3にぶい黄色シルト混細粒砂～粗粒砂　ブロック状
SK4
E．5Y6/1灰色細粒砂～極粗粒砂多混シルト　ブロック状
SK5
F．2.5Y6/1黄灰色細粒砂～粗粒砂混シルト　ブロック状
SK6
G．2.5Y7/2灰黄色細粒砂～粗粒砂混シルト　ブロック状
SK7
H1．2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト　ブロック状
H2．2.5Y4/1黄灰色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト　ブロック状

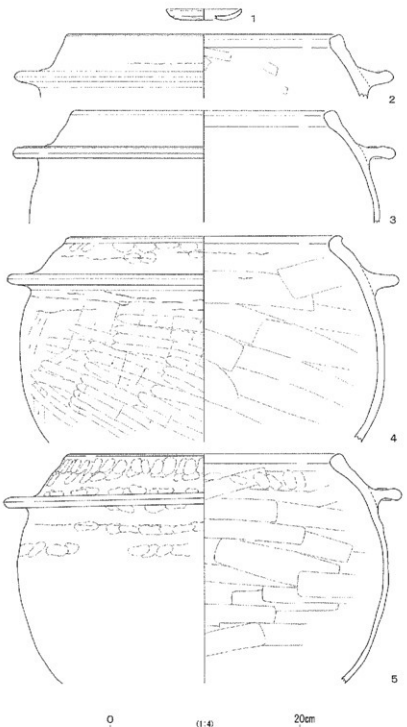
SD1
1．2.5Y6/2灰黄色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト　ブロック状

SP1
2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト　ブロック状

SE1
A1．2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト　ブロック状
A2．5Y6/2灰オリーブ色シルト質粘土混細粒砂～粗粒砂　ブロック状
SE2
B1．10YR6/3にぶい黄橙色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト　ブロック状
B2．10YR5/3にぶい黄褐色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト　ブロック状
B3．10YR5/3にぶい黄褐色細粒砂～粗粒砂多混シルト　ブロック状
B4．2.5Y5/1黄灰色シルト質粘土混細粒砂～粗粒砂　ブロック状
SE3
C1．2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト　ブロック状
C2．2.5Y6/2灰黄色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト　ブロック状
C3．2.5Y6/3にぶい黄色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト　ブロック状
C4．7.5Y6/1灰色細粒砂～極粗粒砂混シルト　ブロック状

第4図　平断面図

ていた。掘形は断面逆台形を呈し、埋土はブロック状の２層(A1・A2層)を確認した。遺物は13世紀中葉までの土師器・瓦器が出土しており、１～５を図化した。１は土師器皿である。２～５は土師器羽釜である。３～５は井戸枠に使用されていたもの(最下段から５～３)で、４・５は底を欠く以外は完存する。２は枠に使用されていたものかどうかは不明である。これらは口径約29cm・鍔径約41cmを測り、口縁端部の形状では、４は小さく外反させ、他は方形に肥厚する。３～５は

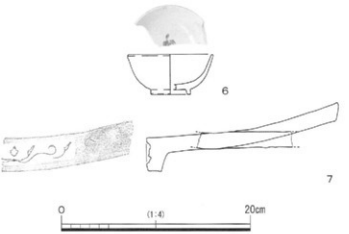


第５図　ＳＥ１出土遺物

底部外面が煤けており使用品である。

ＳＥ２

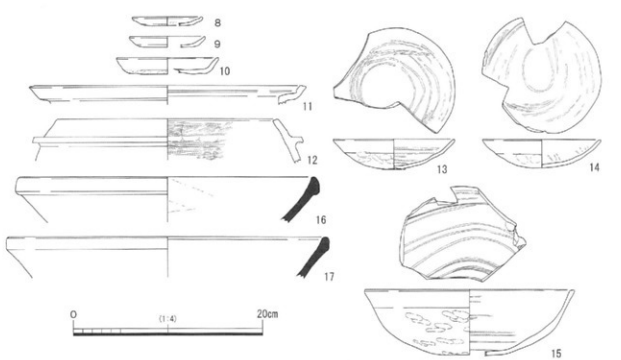
調査区中央で井戸の北部を検出したもので、掘方は直径2.3m程度の円形を呈すると思われる。断面逆凸形に近く、深さ約1.2mを測り、埋土はブロック状の４層（B1～B4層）を確認した。井戸枠は認められなかったが、井筒と考えられる瓦質製品の破片が出土していることから、埋め戻し前に撤去されたものと考えられる。遺物は18世紀頃に比定される磁器、瓦が出土しており、６・７を図化した。６は肥前系磁器碗で、見込み中央にコンニャク印判による五弁花を施す。７は均整唐草文軒平瓦である。



第６図　ＳＥ２出土遺物

ＳＥ３

ＳＥ２西側に近接して検出した井戸で、北・南は調査区外に至るため詳細は不明である。掘方は円形を呈すると思われ、東西径は約3.7mを測る。断面逆台形に近く、深さ約1.1mを測り、埋土はブロック状の４層（C1～C4層）を確認した。井戸枠は認められなかったが、埋め戻し前に撤去されたものと考えられる。遺物は13世紀中葉～後半に比定される土師器・須恵器・瓦器等が、主に上層から出土しており、８～17を図化した。８～10は土師器皿である。11は土師器鍋と考えられる。12は瓦器羽釜で、三足釜と考えられる。内面調整はハケである。13・14は瓦器椀である。13は粘土紐状の高台を有し、14は無高台である。共に見込みに圏線状暗文を施す。口径・器高は



第７図　ＳＥ３出土遺物

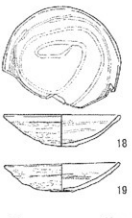
13が12.8cm・3.2cm、14が12.5cm・3.0cmである。15は瓦器鉢である。口縁端部はやや内傾する面を成し、見込みに圏線状暗文を施す。口径22.2cmを測る。16・17は東播系須恵器鉢である。

ＳＫ１

調査区北東角で一部を検出した土坑で、詳細は不明である。検出部分の規模は東西35cm・南北22cm・深さ約12cmを測る。埋土は基本層序３層が落ち込む状況である。遺物は出土していない。

ＳＫ２

ＳＤ１底部で検出した。平面はほぼ円形をなし、規模は東西60cm・南北55cm・深さ約20cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土はブロック状の単層である。遺物は13世紀中葉～後半に比定される瓦器椀が出土しており、18・19を図化した。共に粘土紐状の高台を有し、見込みに圏線状暗文を施す。口径・器高は18が12.4cm・3.4cm、19が12.2cm・3.0cmである。



第８図　ＳＫ２出土遺物

ＳＫ３

調査区東部で検出した土坑で、南は調査区外に至る他、西部をＳＥ２に、東部をＳＤ１に削平されている。検出部分の規模は東西2.8m・南北1.0m・深さ約65cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土はブロック状の２層（D1・D2層）からなる。遺物は18世紀頃に比定される土師器、陶磁器、瓦が出土しており、20～33を図化した。20～27は肥前系磁器である。20～24は碗で、20は梅枝文、21は風景文を描く。22は楓文・菊文、23は花文をコンニャク印判により施す。24は刷毛目唐津である。25は小碗で、竹笹文を描く。高台内の銘は「宣徳年製」と思われるが明確ではない。26は蓋で、草花文を描く。27は内側面に牡丹唐草文、見込みに環状龍文、裏文様に唐草文を描く。裏文様の唐草文は輪郭を線描きし濃みを入れるものである。高台内には渦福を描く他、３箇所にハリ痕が認められる。28は塀摺鉢と考えられる。29は丹波焼擂鉢である。30・31は土師器炮烙である。32は瓦器奈良火鉢で、口縁部外面に菊文を押印する。33は三つ巴文軒丸瓦である。

ＳＫ４

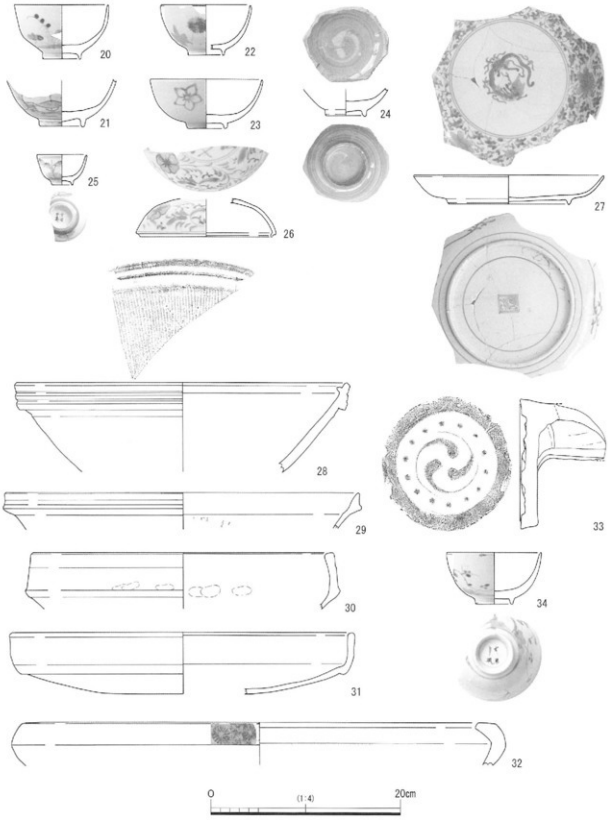
ＳＥ２北側で検出した土坑で、北は調査区外に至る他、南はＳＥ２に削平される。ＳＫ３と連続するが、切り合い等は明確にできなかった。検出部分の規模は東西2.5m・南北1.0m・深さ約40cmを測る。断面逆台形に近く、埋土はブロック状の単層（E層）である。遺物は18世紀頃に比定される磁器、瓦が出土した。

ＳＫ５

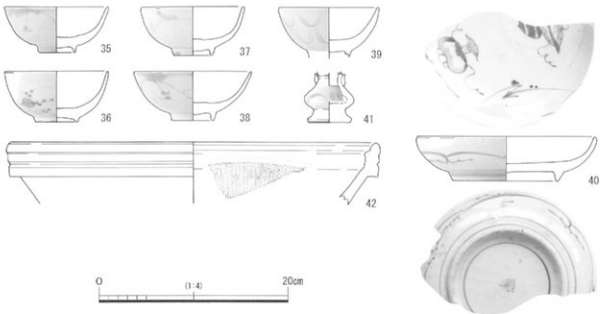
調査区中央南部で検出した土坑で、南は調査区外に至る他、西はＳＥ３に削平される。検出部分の規模は東西50cm・南北75cm・深さ約30cmを測る。断面逆台形に近く、埋土はブロック状の単層（F層）である。底部には一辺15cm程度の立方体状の花崗岩が見られ、これを根石とすれば、当遺構は柱穴の可能性がある。遺物は出土していない。

ＳＫ６

調査区中央北部で検出した土坑で、北は調査区外に至る他、西はＳＥ３を削平している。検出部分の規模は東西60cm・南北35cm・深さ約30cmを測り、埋土はブロック状の単層（G層）である。遺物は出土していない。



第９図　ＳＫ３・ＳＫ７出土遺物



第10図　２層出土遺物

ＳＫ７

調査区西端において、北西－南東方向の直線的な肩から西に落ち込む状況が見られたため、調査区を西に拡張した。検出部分の規模は東西1.9m・南北1.3m・深さ約80cmを測り、埋土はブロック状の２層(H1・H2層)を確認した。遺物は18世紀代に比定される伊万里焼碗、軒丸瓦が出土している。34は伊万里焼碗で、外面に梅枝文を描く。高台内の銘は「太明年製」であるが、崩れて判読し難い。

ＳＰ１

調査区西部で検出したピットで、平面形は直径約20cmの円形を呈し、深さ約10cmを測る。断面椀状を呈し、埋土はブロック状の単層である。遺物は中世頃の土師器皿片が出土した。

ＳＤ１

調査区東部で検出した南北方向の溝で、規模は検出長約1.3m・幅約1.0m・深さ25～30cmを測る。断面皿状をなし、埋土はブロック状の単層である。遺物は出土していない。

２層出土遺物

35～42を図化した。35～40は伊万里焼で、35～39は碗、40は皿である。碗の外面には、35～38は梅枝文、39は二重網目文を描く。40は見込みに巾着図・梅枝文、裏文様に唐草文、高台内には鳳凰を描く。41は瀬戸の双耳瓶である。底部糸切りで、体部外面には緑釉による弧線や斑文を描く。42は堺擂鉢と考えられる。

３．まとめ

調査では周辺の第13・15・20次調査等と同様に、中世(13世紀中葉～後半)、近世(18世紀以降)の遺構・遺物を検出した。遺構密度は極めて高く、また井戸等の大規模な遺構が多くを占めるため、調査範囲の大部分が該期に改変を受けている状況であった。出土遺物量はコンテナ３箱を数える。

13世紀中葉～後半では井戸２基(**ＳＥ１・３**)がある。構築面は**ＳＥ３**(13世紀中葉～後半)が３層上面、**ＳＥ１**(13世紀中葉)が４層上面と異なることから、３層による整地の時期が13世紀後半に限定できそうである。

近世では井戸や土坑から陶磁器や瓦が多く出土しており、また作土と考えられる地層が認められないことから、中世～近世を通して当地は居住域であったと考えられよう。当地が立地する自然堤防上が中世以降安定した居住域であったことが看取される。

【参考文献
・坪田真一1996「Ⅰ　成法寺遺跡第７次調査(ＳＨ91－７)」『成法寺遺跡　財団法人八尾市文化財調査研究会報告51』財団法人八尾市文化財調査研究会
・坪田真一1996「Ⅱ　成法寺遺跡第８次調査(ＳＨ91－８)」『成法寺遺跡　財団法人八尾市文化財調査研究会報告51』財団法人八尾市文化財調査研究会
・西村公助2006「Ⅰ　成法寺遺跡第13次調査(ＳＨ94－13)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告90』財団法人八尾市文化財調査研究会
・西村公助2006「Ⅱ　成法寺遺跡第15次調査(ＳＨ95－15)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告90』財団法人八尾市文化財調査研究会
・河村憲理2009「Ⅲ　成法寺遺跡第20次調査(ＳＨ2007－20)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告127』財団法人八尾市文化財調査研究会
・西村公助2014『19)成法寺遺跡(2013-87)の調査』『八尾市内遺跡平成25年度発掘調査報告書　八尾市文化財調査報告72　平成25年度国庫補助事業』八尾市教育委員会

図版1

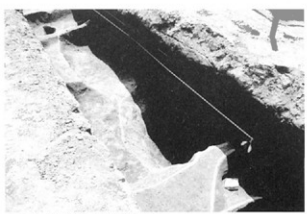
調査地（西から）

機械掘削（東から）

全景（西から）

ＳＥ１（北西から）

ＳＥ１（北西から）

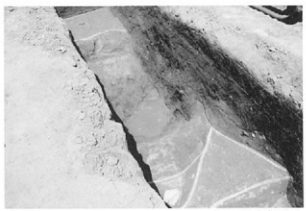


ＳＥ２、ＳＫ３～５（北西から）

ＳＥ２・３、ＳＫ４（南東から）

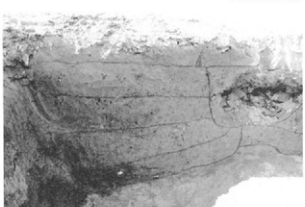
図版2

ＳＥ３（南西から）

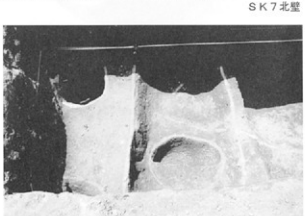

ＳＥ３（南東から）

ＳＫ２（南から）

ＳＫ３（南西から）


ＳＫ７北壁

ＳＰ１（東から）


ＳＥ１，ＳＫ２，ＳＤ１（北から）

調査状況（西から）

図版3

3

4

5

7

10

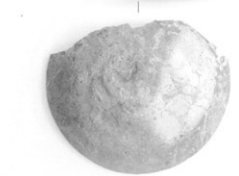
13

12

図版4

18

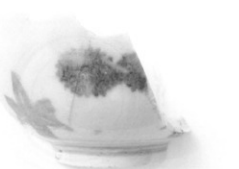
19



14

20

21



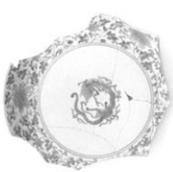
22

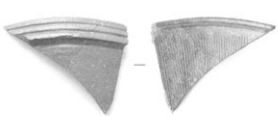
図版5

23

26

25





28

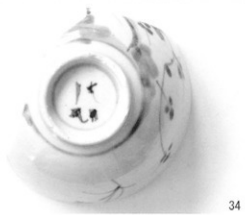
27

32

33

1

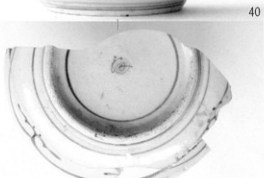
35


34

38

40

41



Ⅳ　中田遺跡第55次調査（ＮＴ2012－55）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市八尾木北六丁目30の一部、41、42で実施したサービス付高齢者向け住宅建設に伴う発掘調査報告書である。
1．本書で報告する中田遺跡第55次調査（ＮＴ2012－55）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財発掘調査指示書に基づくもので、申請者と公益財団法人八尾市文化財調査研究会の間で、八尾市教育委員会を立会者として締結した契約により、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が申請者から委託を受けて実施したものである。
1．調査は当調査研究会　坪田真一が担当した。
1．現地調査は平成24年10月22日～10月29日（実働５日）に実施した。調査面積は約31㎡である。
1．現地調査には飯塚直世・伊藤静江・國津玲子・芝崎和美・永井律子・村田知子が参加した。
1．内業整理は下記が行い、現地調査終了後に着手して平成28年３月31日をもって終了した。
　遺物復元－梶本潤二・竹田貴子・田畠富子
　遺物実測－飯塚直世・伊藤・村井
　遺物トレース－市森千恵子
　遺物写真撮影・図版作成－垣内洋平
1．本書の執筆・編集は坪田が行った。

本　文　目　次

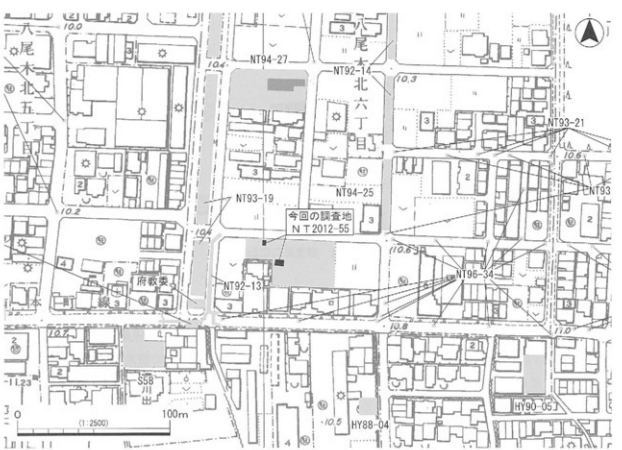
1．はじめに……45
2．調査概要……46
　1）調査の方法と経過……46
　2）基本層序……46
　3）検出遺構と出土遺物……47
3．まとめ……55

Ⅳ　中田遺跡第55次調査（ＮＴ2012－55）

１．はじめに

中田遺跡は、八尾市のほぼ中央に位置し、現在の行政区画では中田一～五丁目、刑部一～四丁目、八尾木北一～六丁目がその範囲となっている。地理的には旧大和川の主流である長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に立地し、北側で小阪合遺跡、西側で矢作遺跡、南側で東弓削遺跡に接している。当遺跡は、昭和45(1970)年の区画整理事業の際発見された遺跡で、以後中田遺跡調査会・中田遺跡調査センター・八尾市教育委員会・大阪府教育委員会・当調査研究会により調査が続けられている。これらの調査成果から、当遺跡は弥生時代中期～古墳時代前期を中心に、弥生時代前期～中世にわたる複合遺跡であることが確認されている。また同地形上に展開する東郷遺跡・小阪合遺跡等を包括して「東郷・中田遺跡群」と称されており、これらの遺跡は特に古墳時代初頭～前期において最盛期を迎えることが確認されている。

今回の調査地は中田遺跡南端にあたり、周辺では下水道工事に伴う第25次調査（ＮＴ94－25）・第34次調査（ＮＴ96－34）、電気工事に伴う第13次調査（ＮＴ92－13）、楠根川改修工事に伴う第19次調査（ＮＴ93－19）等を実施しており、主に古墳時代初頭～前期の遺構を確認している。第19次調査で検出した前期後半の中田古墳は特筆され、周溝から出土した家形・船形等の豊富な埴輪群の存在から在地の首長者クラスの古墳であると認識されている。



第１図　調査地位置図

2．調査概要

1）調査の方法と経過

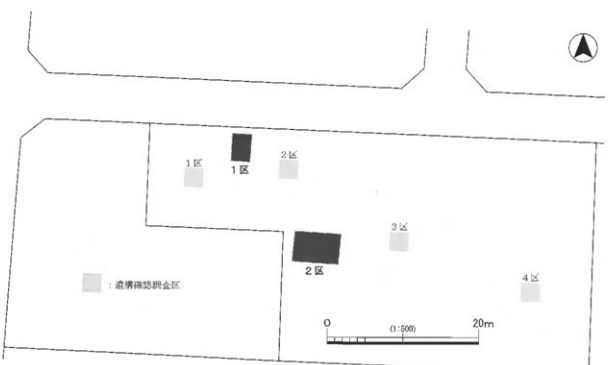
今回の調査は、平成24年８月９・10日に実施した遺構確認調査（中田遺跡(2012-194)）（以下では確認１～４区と呼称する）の結果を受けて実施したサービス付高齢者向け住宅建設に伴う調査で、当調査研究会が中田遺跡内で行った第55次調査（ＮＴ2012－55）である。

調査区は２箇所（北から１・２区）で、規模は１区が東西2.0m×南北3.5m、２区が東西6.0m×南北4.0m、総面積約31㎡を測る。

掘削は、現地表（約T.P.+10.2m）下約0.6～0.8mまでを機械掘削し、以下約1.1mまでを人力掘削により調査を行った。

調査では、調査地北東部に位置する八尾市街区補助点〈3E051：T.P.+10.796m〉を標高の基準とした。

遺構名は、遺構略号＋地区＋面番号＋遺構番号とした。



第２図　調査区位置図

2）基本層序

０層は現耕作土、１層も近代の作土であろう。２層は２区で見られた水成層で、近世の洪水砂であろう。３層は撹拌された作土である。４層は均質なシルト質粘土層で整地層と考えられる。１区北半では見られなかった。下面が第１面である。５層は作土と考えられる。２区南東部では見られない。４・５層下面が第２面である。６層は土壌化層で、古墳時代初頭～前期の遺物包含層である。７層は水成層で、上部は土壌化する。上面が第３面である。８層は水成層である。

3）検出遺構と出土遺物

〈第１面(T.P.+9.6m)〉

２区４層下面で東西方向に平行して延びる溝３条(ＳＤ211～213)を検出した。耕作関連遺構と考えられ、時期は中世～近世であろう。なお平面的には調査していないが、１区においても同様の遺構を断面で確認している。

ＳＤ211

北部で検出した溝で、規模は検出長約5.0m、深さ20～25cmで、幅は東部が約50cm、西部では北肩が北側に湾曲して行くため1.3m以上を測る。断面逆台形を成し、埋土は２層(71・72層)からなるが、71層は整地層である基本層序４層に類似し、整地の際に埋め立てられた層である。遺物は時期不明の土師器片の他、下層から巻き上げられた埴輪片が出土した。

ＳＤ212

ＳＤ211の南約75cmに平行して延びる溝で、規模は検出長約2.7m、幅約18cm、深さ約10cmを測る。埋土は71層で、時期不明の土師器片が出土した。

ＳＤ213

ＳＤ212の南約40cmに平行して延びる溝で、規模は検出長約2.8m、深さ約10cm、幅は約30cmであるが、北肩で１箇所、南肩で２箇所の拡張部がみられ、この部分では幅40～50cmを測る。埋土は71層で、下層から巻き上げられた古式土師器片が出土した。

〈第２面(T.P.+9.6m)〉

２区４・５層下面で古墳１基(古墳221)を検出した。

古墳221

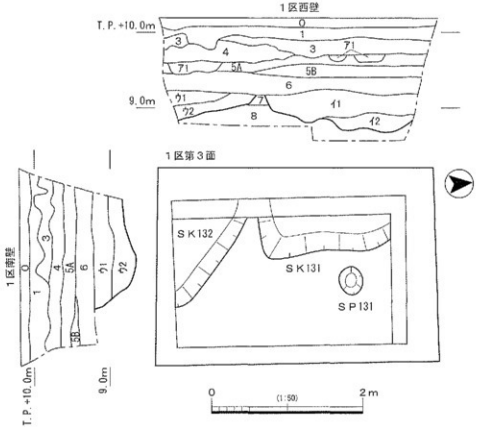
調査区南東部に墳丘、その北側に周溝を有する古墳である。墳丘の肩のライン、及び周溝は北東－南西方向に直線的に延びるもので、規模等の全容は不明であるが方墳の一部と考えておきたい。主軸方向は北－約63度－東である。

墳丘は東西約4.0m、南北約2.5mに亘って検出した。墳丘盛土は層厚15～40cmが遺存しており、上部は削平されていると考えられる。墳丘盛土は固く締まる層相で、３層(Ⅰ①～Ⅰ③層)を確認した。砂混じりのシルト質粘土～シルトでブロック状を呈し、Ⅰ①・③層には径５cm程度の中礫が混在しているが、意図的に混入させたものと考えられる。なおⅠ②層は周溝に向って下がってゆく堆積状況であり、Ⅰ①層のうちⅠ②層の上部に堆積する部分を含めて、墳丘盛土の崩落土の可能性もある。

周溝は検出長約5.5m、深さ最大55cmで、幅は検出部分で約1.4mであるが、本来は2.0m程度の規模に復元できる。断面逆台形を呈し、埋土は５層(Ⅱ①～Ⅱ③層、Ⅲ①・Ⅲ②層)を確認した。このうち墳丘裾に堆積するⅡ①～Ⅱ③層は墳丘盛土の崩落土と考えられる。

墳丘上からは古墳時代前期末頃の埴輪片(円筒・朝顔形円筒・形象)が出土した。墳丘削平時に破壊されたものであろう。円筒埴輪では円形透かしが確認できる。形象埴輪では綾杉文等を施し赤色顔料を塗布した壁や屋根、褶回り突帯と考えられる破片から家形埴輪の存在が確認できる。また墳丘盛土には古墳時代初頭頃の古式土師器が含まれている。周溝からは埴輪片・古式土師器が少量出土した他、弥生時代中期の土器も見られた。遺物は１～23を図化した。

１～13は形象埴輪である。１～６は厚さ1.0～1.5cmの板状の個体である。片面に直線文を施す

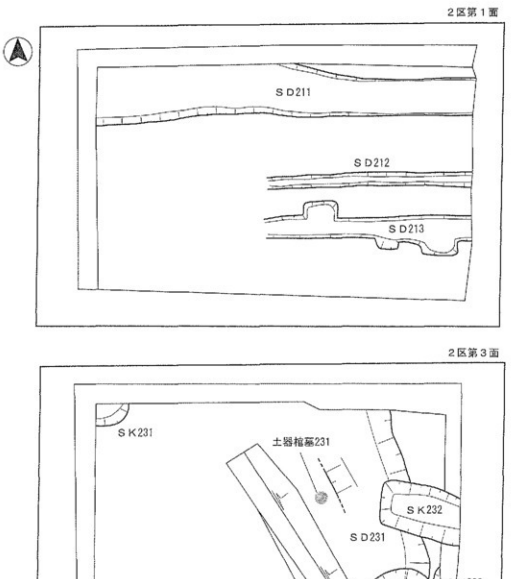


層名(1・2区)

0．5Y4/1灰色極細粒砂～細粒砂混シルト　現耕作土
1．2.5Y6/2灰黄色極細粒砂～細粒砂多混シルト　撹拌作土
2A．2.5Y7/3浅黄色シルト　水成層
2B．2.5Y6/1黄灰色シルト～中粒砂　水成層
3．2.5Y6/3にぶい黄色極細粒砂混シルト　撹拌作土
4．2.5Y6/3にぶい黄色極細粒砂少混シルト質粘土　整地層
5A．10YR6/2灰黄褐色極細粒砂～極細粒砂多混シルト　撹拌作土
5B．10YR4/2灰黄褐色極細粒砂～細粒砂混シルト　撹拌作土
5C．2.5Y6/3にぶい黄色細粒砂～粗粒砂多混シルト質粘土　Fe斑　Mn斑　撹拌作土
5D．10YR6/2灰黄褐色極細粒砂混粘土質シルト　Fe斑　Mn斑　撹拌作土
6．2.5Y5/1黄灰色極細粒砂～粗粒砂混シルト　Fe斑　Mn斑　土壌化層
7．2.5Y6/1黄灰色細粒砂混シルト　Fe斑　水成層　上部土壌化
8．5Y5/1灰色極細粒砂混シルト質粘土　Fe斑　水成層

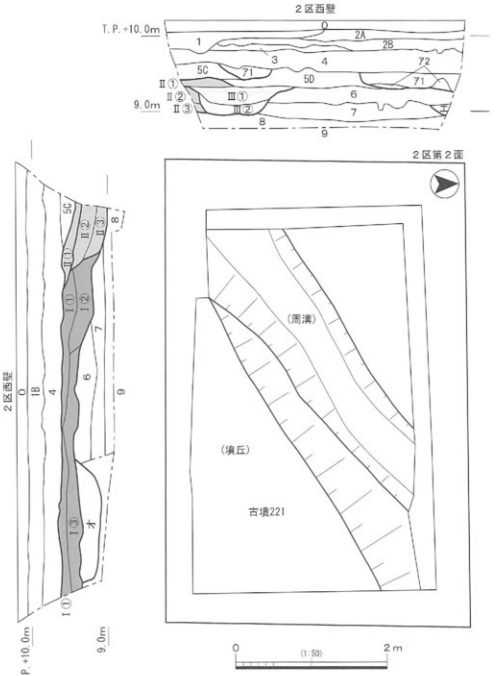
SD211～213
71．7.5Y6/1灰色極細粒砂少混シルト質粘土　Fe斑
72．10YR6/2灰黄褐色極細粒砂～細粒砂混シルト質粘土
SK131
41．7.5Y5/1灰色細粒砂～粗粒砂多混粘土質シルト～シルト　ブロック状
42．5Y5/2灰オリーブ色粘土～シルト質粘土　ブロック状
SK132
91．2.5Y5/1黄灰色極細粒砂～細粒砂多混シルト　ブロック状
92．5Y4/1灰色極細粒砂～細粒砂混シルト質粘土　炭多　ブロック状
SK231
エ．2.5Y5/1黄灰色極細粒砂～細粒砂混粘土質シルト　ブロック状
SK234
オ．2.5Y4/1黄灰色極細粒砂～細粒砂多混シルト　炭　ブロック状

第3図　1区平断面図



第４図　２区第１・３面平面図

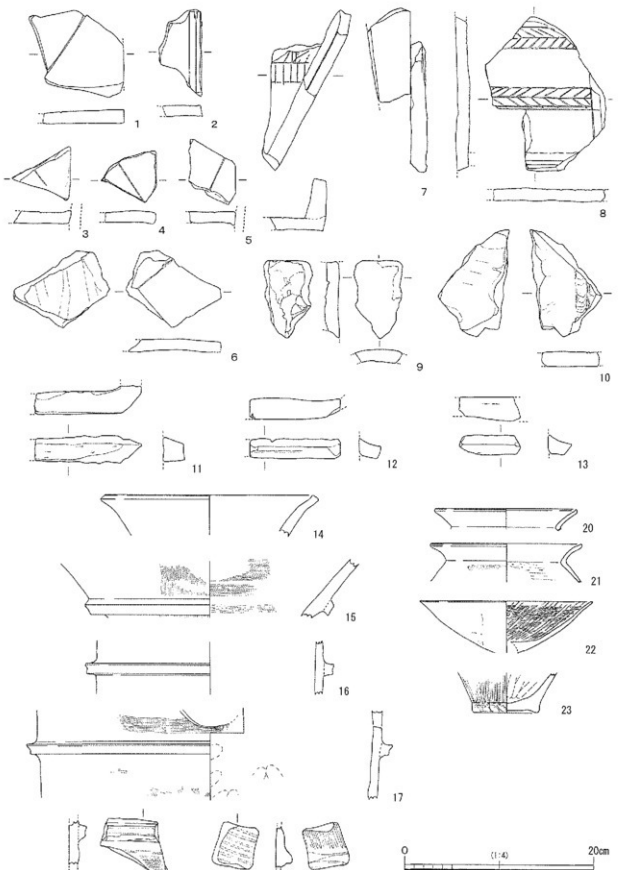
 もので、２は縁辺に平行する２条の平行線である。３・５は剝離面の状況から本体に直角に取り付けられていた部分と考えられる。これらは盾の可能性があるが明確ではない。７は家形埴輪で、切妻造の上屋根の一部である。屋根表面には、横方向に梯子状の線刻、またその上位には破風板に沿って綾杉状の線刻により押縁を表現している。破風板は長さ約10cmが残存しており、幅3.5～4.5cmで上部ほど幅が増す。８は家形埴輪の壁部分と考えられ、横方向の綾杉状の線刻が２段見られる。向って右には縦方向の線刻が認められるが、柱あるいは窓の一部であろう。下端に見ら



Ⅰ 墳丘盛土
Ⅱ 墳丘崩落土～周溝埋土
Ⅲ 周溝埋土

Ⅰ①. 10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂～中粒砂混シルト質粘土　ブロック状　中礫混在
Ⅰ②. 10YR5/1褐灰色極細粒砂混粘土質シルト　ブロック状
Ⅰ③. 10YR3/1黒褐色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土　ブロック状　中礫混在
Ⅱ①. 10YR5/1褐灰色細粒砂混シルト質粘土　ブロック状
Ⅱ②. 10YR4/1褐灰色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト　ブロック状
Ⅱ③. 10YR5/1褐灰色極細粒砂～細粒砂混シルト質粘土　ブロック状
Ⅲ①. 10YR4/1褐灰色細粒砂～極粗粒砂混シルト質粘土　Mn斑
Ⅲ②. 2.5Y6/1黄灰色極細粒砂～細粒砂混シルト質粘土　Fe斑

第５図　２区断面図、第２面平面図



第６図　２区出土遺物

れる剥離面は堀廻突帯の痕跡であろう。9は横断面がやや湾曲する板状の個体で、向って上下に剥離面を有する。10は板状の個体で、1条、2条の直線文の間に列点文状の装飾を施す。共に器種は不明である。11は家形埴輪の堀廻突帯の角部と考えられる。12・13も堀廻突帯の可能性があるが、幅が一定ではないため断定はできない。14・15は朝顔形円筒埴輪である。15は外面タテハケ、内面ヨコハケが認められる。16～19は円筒埴輪の小片である。17は外面ヨコハケで、円形スカシを有するものである。焼成良好で非常に硬質なため須恵質に近い。18は外面ヨコハケ、19は外面粗いタテハケ、内面ヨコハケを施す。これらの埴輪はII期～III期に比定されよう。20～22は古式土師器で、20・21は庄内式甕、22は高杯である。22は内面ハケ後放射状ヘラミガキを施す。これらは庄内式期新相に比定される。23は弥生土器甕で、体部外面及び底面にヘラミガキを施す。河内IV様式に比定される。20～23は下層から巻き上げられた土器である。

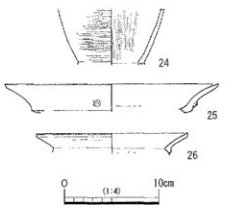
〈第3面(T.P.+9.2～9.4m)〉

7層上面の1区で土坑2基(SK131・132)、ピット1個(SP131)、2区で土器棺墓1基(土器棺墓231)、土坑4基(SK231～234)、溝1条(SD231)を検出した。なおSK234は6層上面が構築面と考えられ、SD231は8層上面で検出した。

SK131

1区北西部に位置し、西・北は調査区外に至るため全容は不明である。検出部分の平面形は隅丸長方形を呈し、規模は南北約1.7m・東西約55cm・深さ約50cmを測る。埋土はブロック状の2層(1・2層)を確認した。

遺物は古式土師器が出土しており、24～26を図化した。24は精製の直口壺で、内湾気味の口頸部である。調整は外面横位、内面縦位のヘラミガキである。25は複合口縁壺で、後円部外面に竹管円形浮文を付す。26は庄内式甕である。これらは古墳時代初頭後半(庄内式期新相)に比定される。

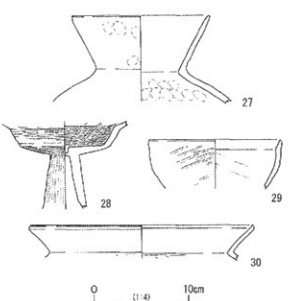


第7図　SK131出土遺物

SK132

1区南西部で検出した。北西－南東方向の直線的な肩から南西に落ち込むもので、肩の南東端は南に屈曲している。検出部分の規模は南北1.0m・東西1.2m・深さ最大55cmで、南東部がやや深くなっている。埋土はブロック状の2層(1・2層)を確認した。

遺物は古式土師器が出土しており、27～30を



第8図　SK132出土遺物

図化した。27は広口壺である。28は口縁二段屈曲の高杯で、調整はヘラミガキを多用する。29は口縁部が短く外反する鉢で、体部外面上位に平行タタキが認められる。30は庄内式甕である。これらは古墳時代初頭後半（庄内式期新相）に比定される。

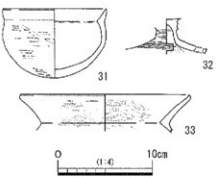
ＳＫ231

２区北西角で弧状をなす掘方の一部を検出したもので、楕円形の平面形が想定されるが詳細は不明である。検出部分の規模は南北約28cm・東西約42cm・深さ約18cmを測る。埋土はブロック状の単層（Ⅱ層）で、遺物は出土していない。

ＳＫ232

２区東部で検出した土坑で、東は調査区外に至る。検出部分の平面形は東西主軸の長方形を呈し、規模は南北約70cm・東西1.1m以上・深さ約30cmを測る。断面逆台形をなし、埋土は上層が2.5Y4/1黄灰色極細粒砂～細粒砂多混シルト（炭含む）、下層が2.5Y5/2暗灰黄色極細粒砂混シルト質粘土で、共にブロック状を呈する。

遺物は古式土師器が出土しており、31～33を図化した。31は小形精製鉢である。外面調整は不明瞭であるが、横位ヘラミガキと考えられる。32は精製の椀形高杯脚部である。調整はヘラミガキを多用し、裾部に四方孔を施す。33は庄内式甕である。これらは古墳時代初頭後半（庄内式期新相）に比定される。



第９図　ＳＫ232出土遺物

ＳＫ233

ＳＫ232南部で弧状をなす掘方の一部を検出したもので、東は調査区外に至り詳細は不明である。検出部分の規模は南北約40cm・東西30cm以上・深さ約30cm、東壁では南北60cmを測る。断面逆台形をなし、埋土はＳＫ232上層と同様である。遺物は出土していない。

ＳＫ234

ＳＫ233の西に隣接して検出した土坑で、楕円形の平面形が想定されるが南は調査区外に至り詳細は不明である。検出部分の規模は南北約60cm・東西1.1m・深さ約30cm、南壁では東西1.6mを測る。断面逆台形をなし、埋土はＳＫ232上層と同様である。遺物は時期不明の古式土師器片が少量出土した。

ＳＰ131

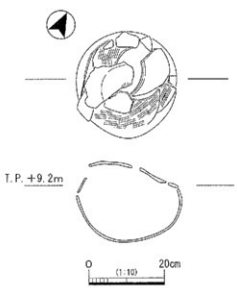
１区北部で検出した。平面形は東西にやや長い楕円形を呈し。規模は南北30cm・東西38cm・深さ約10cmを測る。埋土は2.5Y5/1黄灰色細粒砂混シルト質粘土（ブロック状）で、遺物は出土していない。

ＳＤ231

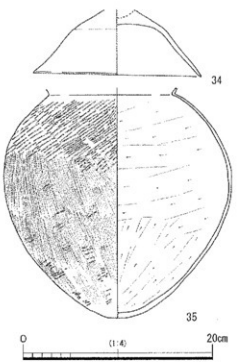
２区東部の８層上面で検出した。南北方向に延びる溝であるが、西肩は一部分の検出であり、また南部はＳＫ234に削平され詳細は不明である。規模は検出長約4.6m・幅約1.0m・深さ約10cmを測る。断面皿状を呈し、埋土は７層が落ち込む状況である。遺物は時期不明の古式土師器片が少量出土した。

土器棺墓231

２区ＳＤ231の西肩際で検出したもので、土器の検出状況から土器棺墓である可能性が高い。正位に置かれた口縁部を欠いた庄内式甕(35)の上に、高杯の杯部(34)を逆位にして被せている。掘方は検出できなかった。34は口縁部ヘラミガキ調整と考えられるが、摩耗のため不明瞭である。35は外面が煤けた使用品で、口縁部を欠く他はほぼ完存する。底体部外面は平行タタキ後下半部ハケである。これらの土器の時期は古墳時代初頭前半に比定される。



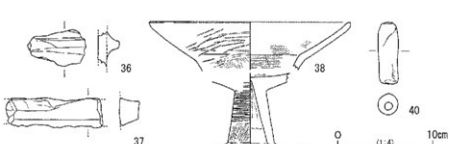
第10図　土器棺墓321平断面図



第11図　土器棺墓231出土遺物

〈包含層出土遺物〉

１区出土の36～40を図化した。36は円筒埴輪である。37は形象埴輪の突帯部である。２区古墳221出土の11に類似しており、家形埴輪の裾廻突帯の可能性が高い。38・39は同一個体と考えられる土師器有段高杯である。ヘラミガキを多用する精製品である。古墳時代前期前半(布留式期古相)に比定される。40は土師器管状土錘である。



第12図　１区包含層出土遺物

３．まとめ

今回の調査では古墳時代初頭・前期、中世～近世の遺構・遺物を検出した。遺物量はコンテナ２箱を数える。

第３面では古墳時代初頭前半の遺構を検出した。土坑・ピットの他、２区では**土器棺墓231**を検出したが、これらの遺構に明確な時期差は認められず、集落域において居住域と墓域とが共存していたものと捉えられる。西方の第19次調査においても、同時期の土坑や溝からなる遺構群中で土器棺墓と考えられる遺構を検出しており、同様の状況が当地でも確認された。また包含層や上部の作土層からは古墳時代前期前半の土器も少量ではあるが出土しており、集落はこの頃まで存続していたと考えられる。

第２面では現耕作面から50～60cmという非常に浅い地点で古墳時代前期末頃の方墳と考えられる**古墳221**を検出した。**古墳221**は第19次調査検出の中田古墳の南東約50mに位置するが、両古墳間の遺構確認調査では、確認１区に南西辺、確認２区に南東辺を有する方墳の存在が想定され、この場合中田古墳（円墳？）から南東方向に方墳２基が並ぶ状況となる。中田古墳が独立墳ではなく、当地に古墳群が形成されていた可能性が高くなったといえ注目される。時期については、**古墳221**からは円形スカシを有する円筒埴輪が出土していることから、中田古墳よりやや下るものと考えられる。

第１面では中世～近世に比定される耕作関連溝が検出され、中世以降、当地が生産域であったことを確認した。

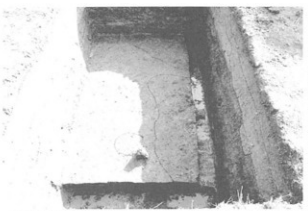
参考文献

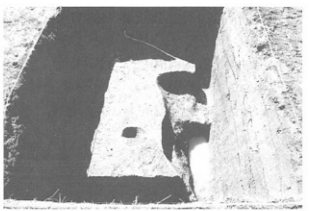
・坪田真一1993「Ⅸ　中田遺跡第13次調査（ＮＴ92－13）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告　財団法人八尾市文化財調査研究会報告39』財団法人八尾市文化財調査研究会
・岡田清一1997「Ⅱ　中田遺跡第14・25次調査（ＮＴ92－14・ＮＴ94-25）」『中田遺跡　財団法人八尾市文化財調査研究会報告56』財団法人八尾市文化財調査研究会
・高萩千秋1998「ⅩⅦ　中田遺跡第34次調査（ＮＴ96－34）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告60』財団法人八尾市文化財調査研究会
・坪田真一・米井友美2009「Ⅱ　中田遺跡第19次調査（ＮＴ93－19）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告126』財団法人八尾市文化財調査研究会
・樋口　薫2013「29）中田遺跡（2012－194）の調査」『八尾市内遺跡平成24年度発掘調査報告書　八尾市文化財調査報告70　平成24年度国庫補助事業』八尾市教育委員会

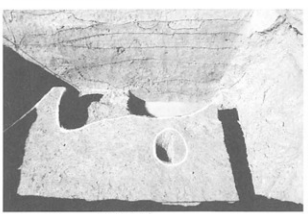
図版1

調査地（東から）

1区機械掘削（東から）


1区第3面検出（北から）


1区第3面（北から）


1区SK131、SP131（東から）

1区SK132（北東から）

1区SK132南壁土器出土状況

1区SP131（南から）

図版2

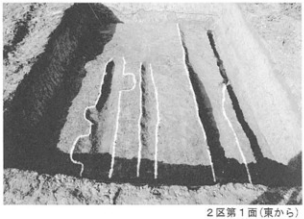
1区南壁

1区西壁

1区調査状況（北から）

2区機械掘削（北西から）

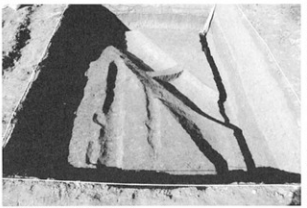
2区第1面検出（南から）


2区第1面（東から）

2区第2面古墳221周溝検出（南西から）

2区第2面古墳221（西から）

図版3


2区第2面古墳221(東から)

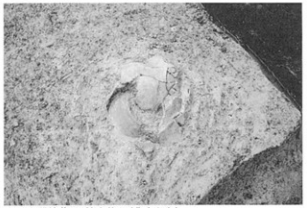
2区第2面古墳221(北東から)

2区第2面古墳221畦南西壁

2区調査状況(東から)

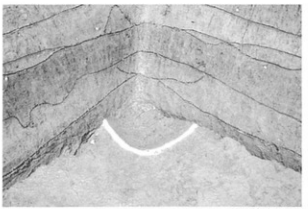
2区第3面(西から)

2区第3面東部(北から)


2区土器棺墓231検出状況(北東から)

2区土器棺墓231(北から)

図版4


２区ＳＫ231（南東から）

２区ＳＫ232（西から）

２区ＳＫ232土器出土状況（北から）

２区ＳＫ234（北から）

２区ＳＫ234南壁

２区ＳＤ231（東から）

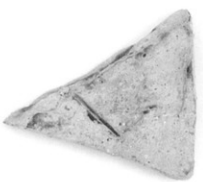
２区南壁

２区西壁

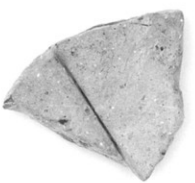
図版5

1

2

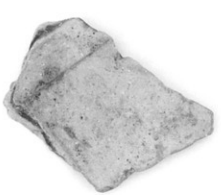


3



4

5

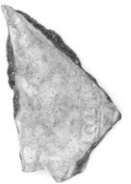


6

7

図版6

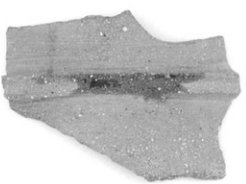
8



10

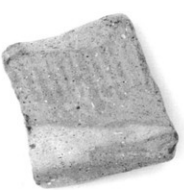
15

16



17

18



19

図版7

25

27

31

34

35

Ⅴ　西郡廃寺第６次調査（ＮＫＴ2009－６）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市泉町三丁目60番１、60番２、69番、70番、71番、72番、81番で実施した、工場建設に伴う発掘調査報告書である。
1．本書で報告する西郡廃寺第６次発掘調査（ＮＫＴ2009－６）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づくもので、申請者と財団法人八尾市文化財調査研究会の間で、八尾市教育委員会を立会者として締結した契約により、財団法人八尾市文化財調査研究会が申請者から委託を受けて実施したものである。
1．現地調査は平成21年７月13日～７月31日にかけて、西村公助を担当者として実施した。調査面積は約356㎡である。
1．現地調査においては、飯塚直世・梶本潤二・竹田貴子・田島宣子・永井律子・村井俊子・村田知子の参加を得た。
1．内業整理業務は下記が行い、現地調査終了後に随時実施し、平成28年３月31日に終了した。
遺物実測－市森千恵子、図面トレース－市森・西村、遺物写真撮影－西村
1．本書の執筆・編集は西村が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……63
2．調査概要……64
1）調査の方法と経過……64
2）基本層序……65
3）検出遺構と出土遺物……66
3．まとめ……71

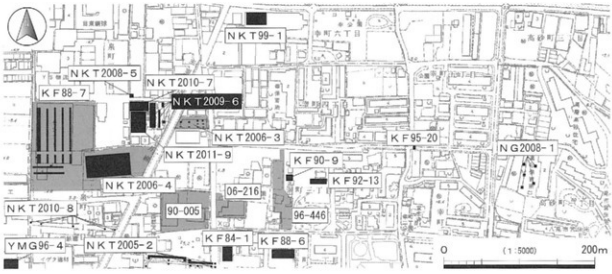
Ⅴ　西郡廃寺第６次調査（ＮＫＴ2009－６）

１．はじめに

西郡廃寺は八尾市北部の泉町二・三丁目、桂町二丁目、幸町一・三・四・六丁目に所在し、その範囲は径500m程度と推定されている。地理的には旧大和川水系の主流であった長瀬川と玉串川に挟まれた低位沖積地上に位置する。周辺の遺跡としては、西郡廃寺を含む遺跡として西郡遺跡があり、西に山賀遺跡、南に萱振遺跡が隣接している。西郡廃寺は飛鳥時代中期創建とされ、泉町二丁目に鎮座する西郡天神社の境内にある塔心礎の存在から、同神社北側に寺域が想定されている。これまでの発掘調査や採集資料で、創建期の軒丸瓦や、奈良時代～中世の軒瓦が確認されているが、寺院関連の遺構や寺域を推定する遺構等の検出には至っていない。

当遺跡範囲は、当初の遺跡名が萱振遺跡(萱振Ａ遺跡)や西郡廃寺とされていたが、その後、萱振遺跡の北部が西郡廃寺遺跡となった。さらに西郡遺跡と改称すると共に、範囲内北部に西郡廃寺の範囲が設定され、現在に至っている。こうした経緯から、現在西郡廃寺とされている範囲であるが、調査時の名称が萱振遺跡である地点も多く存在する。

当遺跡はこれまでの発掘調査から、弥生時代後期以降の複合遺跡であることが確認されている。今回の調査地の南西部では、当調査研究会が第４次調査（ＮＫＴ2006－４）や、萱振遺跡第７次調査（ＫＦ88－７）を実施しており、古墳時代初頭～前期、古墳時代後期～飛鳥時代初頭、古代～中近世の遺構を確認している。さらに北東部の第１次調査（ＮＫＴ99－１）では奈良時代後半～平安時代初頭の掘立柱建物を検出し、当該期の居住域の存在が明らかになっている。



第１図　調査地周辺図

表1　周辺の調査地一覧表

略号	所在地	調査期間	調査原因	主な検出遺構	主な出土遺物	参考文献
NKT 2006－3	泉町三	2006/10	工場建設	弥生後期末～奈良-溝・小穴	弥生後期末～奈良-弥生土器・土師器・須恵器・瓦	高灰千秋　2009. 3『VI　西郡廃寺第3次調査(NKT2006－3)』財団法人八尾市文化財調査研究会報告 127
NKT 2006－4	泉町二	2007/1～4	店舗建設	古墳前期 河川、古墳後期 掘建柱建物、奈良-土坑、平安～鎌倉-井戸、近世-井戸・溝	古墳中期-埴輪	西村公助　2012「西郡廃寺第4次調査」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告 137』財団法人八尾市文化財調査研究会
NKT 2008－5	泉町三	2008/12～2009/1	公共下水道	古墳-ピット、中世-溝、	古墳時代-須恵器、中世-土師器・須恵器・瓦質土器・白磁	木村徳明　2010. 3『IV　西郡廃寺第5次調査(NKT2008－5)』財団法人八尾市文化財調査研究会報告 129
NKT 2009－6	泉町三	2009/7～9	工場建設	古墳前期(布留式期)-小穴、古墳後期-土坑1、平安後期-土坑	古墳前期以降-土師器・須恵器	今回報告
NKT 2010－7	泉町三	2010/5～8	工場建設	古墳後期-井戸2、中世-井戸2・土坑5	弥生後期-弥生土器、古墳初頭-古式土師器、古墳後期-土師器・須恵器、中世-土師器・瓦器・白磁	樋口　薫　2011. 6「(19)西郡廃寺第7次調査(2010－7)」『平成22年度　(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』
NKT 2010－8	泉町二	2010/9～10	公共下水道	中世 土坑2・河川1	古墳前期-古式土師器、古代～中世-土師器・須恵器・瓦	戸田真一　2011. 6「(20)西郡廃寺第8次調査(2010－8)」『平成22年度　(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』
NKT 2011－9	泉町三	2011/4～5	工場建設	平安末～鎌倉-井戸1・土坑2・柱穴4・溝2・堆状遺構、近世-井戸1・河川1	弥生前・後期-土器・石器、古墳-古式土師器・須恵器、奈良-土師器、平安末～鎌倉-土師器・瓦器、近世-陶磁器・瓦	成海佳子　2012. 6「25.西郡廃寺第9次調査(2011－9)」『平成23年度　(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』
NKT 88－7	泉町二	1989/2～3	倉庫建設	古墳前期-小穴・溝、古墳後期-建物・井戸・土坑・溝等からなる居住域、近世 井戸	古墳前期-庄内式新相の土器類・木製品(広鋤・方形容器)、古墳後期 土器類・軒丸瓦・丸瓦・平瓦	原田昌則　1996. 7『I　萱振遺跡(第6次調査)』財団法人八尾市文化財調査研究会報告 52
NKT 94－3	山賀町四	1995/1～2	寮・研修棟建設	弥生前期-土坑9・小穴21・溝5	弥生 土器(第I様式新段階)	原田昌則　2004. 12『I　山賀遺跡(第3次調査)』財団法人八尾市文化財調査研究会報告 81

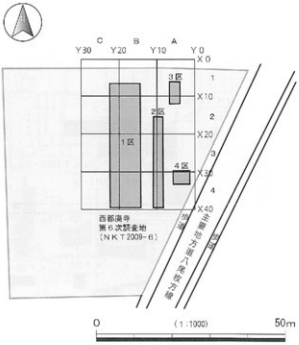
2．調査概要

1）調査の方法と経過

今回の調査は、研究会が西郡廃寺遺跡内で行った第6次調査にあたる。工事予定地に東西8m、南北33mの調査地(1区)、東西2.5m、南北24mの調査地(2区)、東西3m、南北6mの調査地(3区)、東西4.5m、南北3.5mの調査地(4区)を設定した。総面積は約356㎡である。なお調査は、掘削土の置き場の都合上、1区から4区の順に行った(第2図)。

機械掘削は、現地表(T.P.+5.4m)下約 0.8mまでに存在する近世の耕作土までとし、これ以下の約 0.3mを人力で掘り進め遺構や遺物の検出に努め、記録や写真撮影作業を適宜行った。なお、2区・3区のほぼ全面と1区の南部、4区の西半分は既存の建物基礎工事により現地表下約 1.6mまで掘削されており、試掘調査で確認している遺物包含層はなかった。

調査区全体の地区割は、任意の基準点(X0・Y0)を調査地の北東へ置き、そこを起点に南へ40m、西へ30mの範囲に設定した。区割は、10m毎に南へ算用数字の1～4、西へアルファベ



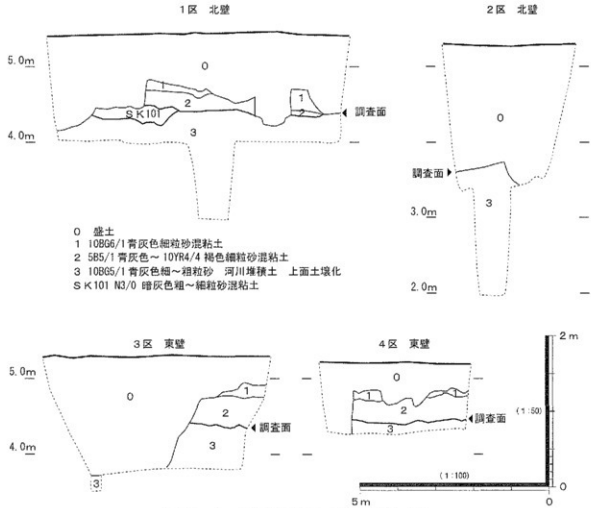
第2図　調査区位置図

ットのＡ～Ｃを付け、北東隅の交点から南西側を１区画の単位とした。区画は、１Ａ～４Ｃ地区と呼称する。地点の表記は、Ｘ軸とＹ軸の交点を数値で示した（第２図）。遺構番号の数字は、右の一～二桁目が遺構番号、三桁目は検出区番号を示している。

２）基本層序

調査地全体を通して０～３層を基本層序とした。

０層は盛土および客土である。１層は、青灰色細粒砂混粘土で、作土と推測されるが、遺物の出土はなく時期は不明である。２層は、青灰色～褐色細粒砂混粘土で、層内からは古墳時代後期～鎌倉時代の遺物が出土した。３層は、青灰色細～粗粒砂の河川堆積土である。上面は土壌化しており、層内からは弥生時代中期後半～古墳時代初頭の遺物が出土した。



第３図　１～４区壁面実測図　縦１：50横1：100

3）検出遺構と出土遺物

1区では、3層上面で平安時代後期の土坑1基（ＳＫ101）、小穴10個（ＳＰ101～110）、古墳時代後期の土坑1基（ＳＫ102）、古墳時代前期[布留式期]の小穴1個（ＳＰ111）を検出した。また、4区では3層上面で古墳時代後期の小穴2個（ＳＰ401・402）を検出した。

ＳＫ101

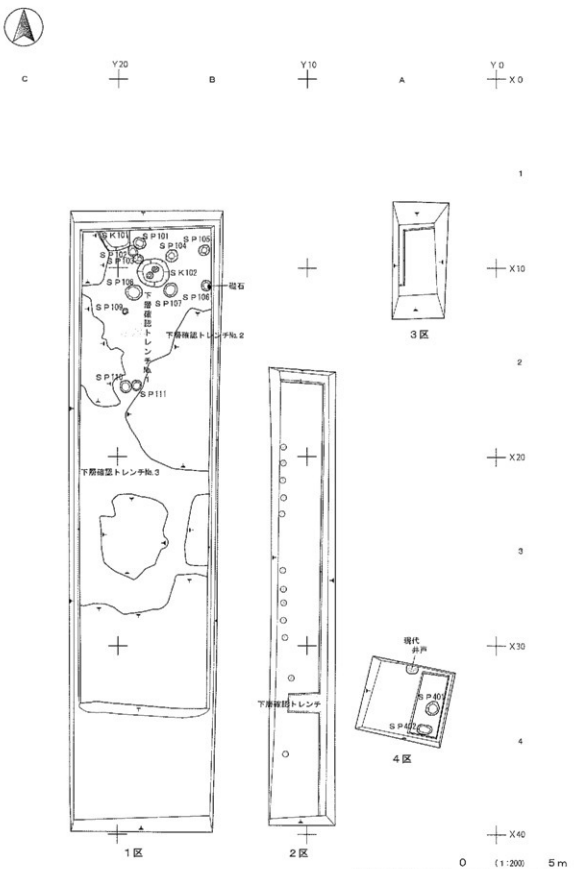
ＳＫ101は、1区の北部で検出した。平面の形状は隅丸長方形で、長径1.6m、短径1.5mを測る。断面の形状は逆台形で、深さ0.1mを測る。埋土はN3/0暗灰色粗～細粒砂混粘土で、瓦器の破片が出土した。

ＳＰ101～110

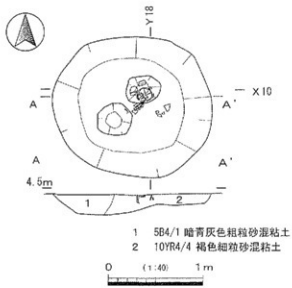
ＳＰ101～110は1区の北部で検出した。平面の形状には円形（ＳＰ101・102）と楕円形（ＳＰ103～110）があり、径0.35～0.8mを測る。断面の形状は逆台形（ＳＰ101～108）と皿形（ＳＰ109・110）で、深さ0.05～0.1mを測る。埋土はＳＰ101がN3/0暗灰色粗粒砂混粘土、ＳＰ102がN5/0灰色細粒砂混粘土、N3/0暗灰色粗粒砂混粘土、ＳＰ103～108が5Y4/1灰色細粒砂混粘土、ＳＰ109・110が5Y6/1灰色細粒シルト質粘土で、土師器、須恵器、瓦器などが出土した。この内ＳＰ103～105は1.8m間隔に、ＳＰ106～108は2.0m間隔に並んでいることから建物などの構築物に伴う柱穴ではないかと推定できる。ＳＰ101からは平安時代後期の土師器皿（1）と瓦器椀（2）が出土した。また、ＳＰ106からは平安時代後期の礫石（3）、ＳＰ107からは平安時代後期の土師器皿（4）、瓦器椀（5）が出土した。1の口縁部は平らな底部から折れ曲がり内湾する。端部は丸く終わる。底部の内外面はユビナデ、口縁部の内外面はヨコナデを施す。2の口縁部は内湾する。端部は外側に短く曲がり、丸く終わる。体部の内外面は横方向のヘラミガキを施す。口縁部の内外面はヨコナデを施す。3は平らな面が2面ある。4の口縁部は二段に屈曲する。端部はつまみ出し内側へ折れ曲がる。口縁部の内外面はヨコナデを施す。5の口縁部は内湾する。端部は丸く終わる。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内外面は横方向のヘラミガキを施す。

ＳＫ102

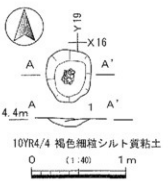
ＳＫ102は、1区の北部で検出した。平面の形状は円形で、径1.65mを測る。断面の形状は逆台形で、深さ0.2mを測る。埋土は5B4/1暗青灰色粗粒砂混粘土、10YR4/4褐色細粒砂混粘土で、土師器壺（6～8）、須恵器壺（9）、須恵器提瓶（10）、砥石（11）が出土した。6の口縁部は直立気味にやや外側に広がる。端部は尖り気味につまみ出し、丸く終わる。口縁部の内外面はヨコナデを施す。7の口縁部は直立気味にやや外側に広がる。端部は尖り気味に外側へつまみ出し、丸く終わる。口縁部の内面はハケナデのちヨコナデを、外面はヘラミガキのちユビナデを施す。8の口縁部は直立気味にやや外側に広がる。端部は外側へつまみ出し、丸く終わる。体部の内面はハケナデのちユビナデを、外面は斜方向のヘラミガキのちユビナデを施す。口縁部の内面は横方向のハケナデのちヨコナデを、外面は縦方向のヘラミガキのちユビナデを施す。9の口縁部は直立気味にやや外側に広がる。端部は丸く終わる。端部の内面には強いナデによる凹線状の窪みがある。口縁部の内外面は回転ナデを施す。10の体部は円形で、上位の左右に角状の把手が貼り付く。口縁部は内湾し外側に広がる。端部は尖りぎみに丸く終わる。体部の内面は回転ナデを施し、粘土接合痕が見られる。外面は回転カキメを施す。口縁部の内外面は回転ナデを施す。体部と口縁部の接合部分には粘土接合痕が部分的に見られる。11は平らに研かれている面を4面確認した。


C
B
A
Y20
Y10
Y0
X0
X10
X20
X30
X40
1
2
3
4
SK101
SP101
SP105
SP104
SP103
SP102
SK102
磁石
SP108
SP107
SP106
SP109
下層確認トレンチNo.1
下層確認トレンチNo.2
SP112
SP111
下層確認トレンチNo.3
3区
現代井戸
SP401
SP402
4区
下層確認トレンチ
1区
2区
○建物基礎(コンクリート柱跡)
0
(1:200)
5m

第４図　１～４区　平面図



第5図 ＳＫ102 平・断面図



第6図 ＳＰ111 平・断面図

ＳＰ111

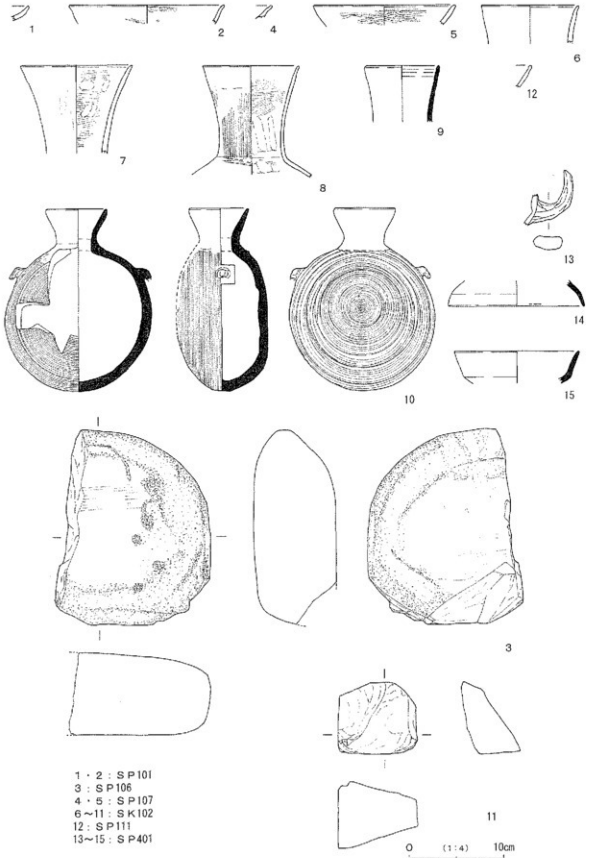
ＳＰ111は、１区の北部で検出した。平面の形状は円形で径0.5ｍを測る。断面の形状は皿形で、深さ0.1ｍを測る。埋土は10YR4/4褐色細粒シルト質粘土で、古墳時代前期［布留式期］の古式土師器甕(12)が出土した。12の口縁部は内湾する。端部は内側に肥厚し丸く終わる。口縁部の内外面はヨコナデを施す。

ＳＰ401

ＳＰ401は、４区のほぼ中央の東寄りで検出した。平面の形状は楕円形で長径0.8ｍ、短径0.5ｍを測る。断面の形状は逆台形で、深さ0.1ｍを測る。埋土は10YR4/4褐色細粒砂混粘土で、古墳時代後期の土師器鍋？の把手(13)、須恵器杯蓋(14)、須恵器高杯(15)が出土した。13のは角状の把手部で、内外面はユビナデを施し、粘土接合痕が見られる。14の口縁部は内湾する。端部は丸く終わる。天井部、口縁部の内外面は回転ナデを施す。15の口縁部は外反する。端部は尖りぎみに丸く終わる。口縁部の内外面は回転ナデを施す。

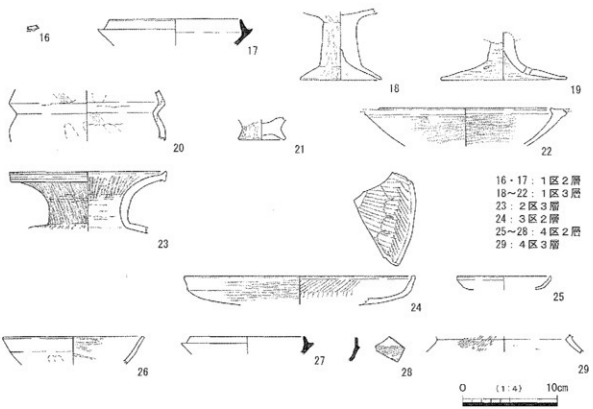
ＳＰ402

ＳＰ402は、４区の南部で検出した。平面の形状は楕円形で長径0.8ｍ、短径0.7ｍを測る。断面の形状は逆台形で、深さ0.15ｍを測る。埋土は10YR4/4褐色細粒砂混粘土で、土師器、須恵器の破片が出土した。



1・2：ＳＰ101
3：ＳＰ106
4・5：ＳＰ107
6～11：ＳＫ102
12：ＳＰ111
13～15：ＳＰ401

第７図　出土遺物実測図



第8図　出土遺物実測図

遺構に伴わない出土遺物

1区の2層からは鎌倉時代の瓦器椀(16)、古墳時代後期の須恵器杯身(17)が出土した。16は底面には高台部が貼り付く。底部の内面はヘラミガキを、外面はユビナデを施す。高台部は粘土紐を用い、粗雑に貼り付けている。17の口縁部は内傾し伸びる。端部は尖りぎみに丸く終わる。受部は水平からやや上方へ短く伸びる。口縁部および受部の内外面は回転ナデを施す。

1区の3層からは古墳時代初頭の古式土師器高杯(18・19)・手焙形土器(20)、弥生時代後期の甕(21)、弥生時代中期の高杯(22)が出土した。18の杯部は平らで、脚部は柱状である。裾部は「ハ」の字にひらく。杯部の内外面および脚部と裾部の外面はヘラミガキを施す。裾部の内面はハケナデのちユビナデを施す。19の脚部は円柱状で短い。裾部は「ハ」の字にひらき、端部は丸く終わる。脚部と裾部の外面はヘラミガキを施す。脚部の内面はユビナデを施し、シボリ目が確認できる。裾部の内面はヘラミガキのちユビナデを施す。20の口縁部は受け口状を呈し、その上部に覆部が付く。体部の内面はハケナデのちユビナデ、体部の外面はユビナデを施す。口縁部の内外面および覆部の内面はユビナデを施す。覆部の外面はハケナデを施す。口縁と覆部の接合部および体部の外面に粘土接合痕が見られる。21の底部は「ハ」の字にひらく上げ底である。底部の内外面はユビナデを施す。体部の内面はユビナデを、外面は右上がりのタタキを施す。22の口縁部は水平で、内側に突帯を貼り付けている。口縁部の内外面は、ヨコナデを、杯部の内外面は横方向のヘラミガキを施す。

2区の3層からは弥生時代後期の壺(23)が出土した。23の頸部は直立ぎみに外側へ開き、口縁部は外反する。端部は上下に拡張し面をもつ。体部は球形を呈すと思われる。体部の内面はユビ

ナデ、外面はヘラミガキを施す。頸部の内面は横方向、外面は縦方向のヘラミガキを施す。口縁部の内外面は放射状にヘラミガキを密に施す。端部は凹線を施す。

３区の２層からは奈良時代の土師器皿(24)が出土した。24の口縁部は、外反ぎみに外側へ伸びる。端部は内側に肥厚し丸く終わる。底部、口縁部の内面は放射状にヘラミガキを施す。底部、口縁部の外面は横方向のヘラミガキを施す。

４区の２層からは平安時代後期の土師器小皿(25)・瓦器椀(26)、古墳時代後期の須恵器杯身(27)・高杯(28)が出土した。25の口縁部は内湾ぎみに外側へ伸びる。端部は上方につまみ出し丸く終わる。底部の内外面はユビナデ、口縁部の内外面はヨコナデを施す。26の口縁部はやや外反し、端部は丸く終わる。体部の内面は横方向のヘラミガキを粗雑に施す。外面はユビナデを施す。口縁部の内面はヘラミガキ、外面はヨコナデを施す。27の口縁部は内傾し伸びる。受部は水平からやや上方へ短く伸びる。口縁部および受部の内外面は回転ナデを施す。28の杯部は内湾する。外面の上部に突帯を、下部に凹線を、その間に刺突文を施す。内外面は回転ナデを施す。

４区の３層からは古墳時代初頭の古式土師器甕(29)が出土した。29の体部と口縁部の境は「く」の字に屈曲する。体部の内面はヘラケズリ、外面は右上がりのタタキを施す。

３．まとめ

調査地全域を流れる河川（３層）が埋没する古墳時代初頭には調査地全体が微高地になり、この砂層上面で古墳時代前期～平安時代後期に至る遺構を検出した。

１区で検出した古墳時代前期の遺構と同時期の遺構は、北東約150ｍの第１次調査でも検出しており、今回の調査地から第１次調査までの範囲に居住域がある可能性が高いと言える。

１区と４区で検出した古墳時代後期の遺構や、１区の北部で検出した平安時代後期の建物に伴う遺構の同時期の遺構は、南西約50ｍ地点の第４次調査でも検出している。このことから同時期の居住域は北東側に広がることが明らかになった。

【参考文献】
・原田昌則1996「Ⅱ　萱振遺跡第７次調査（ＫＦ88－７）」『萱振遺跡　財団法人八尾市文化財調査研究会報告52』財団法人八尾市文化財調査研究会
・高萩千秋2000「Ⅲ　西郡廃寺遺跡第１次調査」『八尾市立埋蔵文化財調査センター報告１』八尾市教育委員会　財団法人八尾市文化財調査研究会
・河村恵理2007「Ⅱ　西郡廃寺遺跡第２次調査（ＮＫＴ2005－２）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告95』財団法人八尾市文化財調査研究会
・原田昌則2007「Ⅰ　萱振遺跡第16次調査（ＫＦ94－16）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告95』財団法人八尾市文化財調査研究会
・西村公助2012「Ⅰ　西郡廃寺第４次調査（ＮＫＴ2006－４）」『(財)八尾市文化財調査研究会報告137』財団法人八尾市文化財調査研究会

図版1

調査地周辺（南西から）【奥は生駒山地】

調査前（北東から）

調査地周辺（東から）

調査地周辺（北から）

1区調査状況（北から）

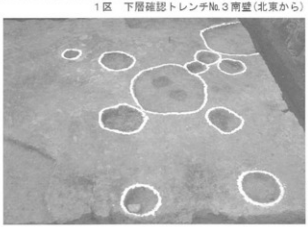
図版２

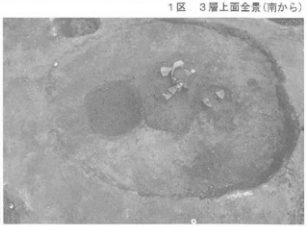
１区　堆積掘削状況（南東から）

１区　北壁（南から）

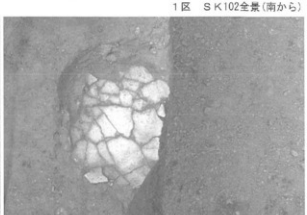
１区　下層確認トレンチNo.３南壁（北東から）

１区　３層上面全景（南から）


１区　北部遺構検出状況（東から）


１区　ＳＫ102全景（南から）

１区　ＳＫ102遺物出土状況（南から）


１区　ＳＰ111遺物出土状況（南から）

図版3

2区　3層上面全景(南から)

2区　北壁(南から)

2区　下層確認トレンチ東壁(西から)

3区　3層上面全景(南から)

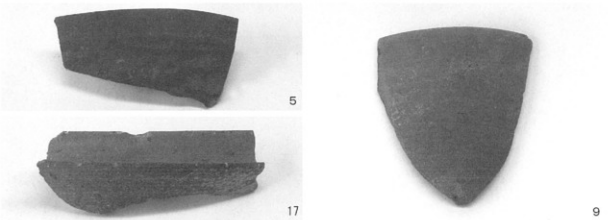
3区　北壁(南から)

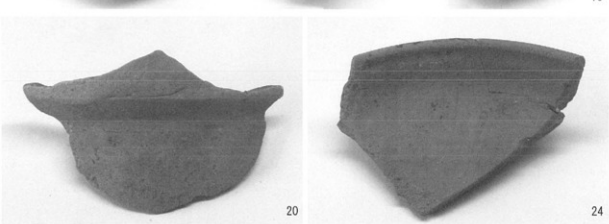
4区　3層上面全景(南から)

4区　北壁(南から)

4区　東壁(西から)

図版４





１区ＳＰ106（３）　１区ＳＰ107（５）　１区ＳＫ102（８～10）　１区２層（17）　１区３層（20）　３区２層（24）

Ⅵ　西郡廃寺第９次調査（ＮＫＴ2011－９）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市泉町二丁目60番1・60番2・69番・70番・71番・72番・81番で実施した工場建設に伴う発掘調査報告書である。
1．本書で報告する西郡廃寺第9次（NKT2011－9）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づくもので、申請者と財団法人八尾市文化財調査研究会の間で、八尾市教育委員会を立会者として締結した契約により、財団法人八尾市文化財調査研究会が申請者から委託を受けて実施したものである。
1．現地調査は、平成23年4月25日～7月15日（実働23日間）にかけて、成海佳子を担当者として実施した。調査面積は約486㎡である。
1．現地調査においては飯塚直世・市森千恵子・梶本潤二・芝﨑和美・竹田貴子・田島宣子・永井律子・村井俊子・村田知子の参加を得た。
1．内業整理業務は下記が行い、現地調査終了後に随時実施し、平成28年3月31日に終了した。
1．本書に関わる業務は、成海が行った。なお本文の文責は文末に記した。
遺物実測－伊藤静江・永井・村田、遺物トレース－伊藤、デジタルトレース－國津・西村、遺物写真撮影・編集－西村
1．本書の執筆は成海・西村、編集は西村が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……77
2．調査概要……78
　1）調査方法と経過……78
　2）基本層序……79
　3）検出遺構と出土遺物……80
3．まとめ……84

Ⅵ　西郡廃寺第９次調査（ＮＫＴ2011－９）

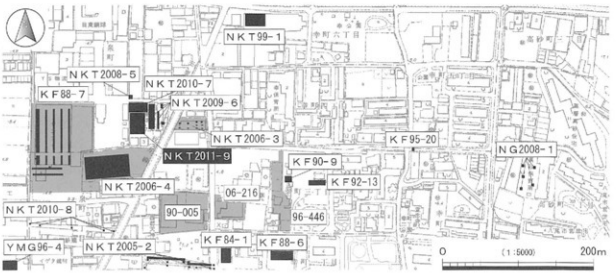
１．はじめに

西郡廃寺は八尾市北部の泉町二・三丁目、桂町二丁目、幸町一・三・四・六丁目に所在し、その範囲は径500m程度と推定されている。西郡廃寺が属する西郡遺跡は旧大和川の支流である玉串川と長瀬川に挟まれた沖積地に位置しており、この沖積地上には、南から北へと東弓削・中田・矢作・小阪合・成法寺・東郷・萱振・西郡・山賀、さらに東大阪市若江・瓜生堂などの遺跡が数多く存在している。

西郡廃寺は、旧令国制の河内国若江郡鴨部郷に位置したとされる古代寺院で、当調査地南150mの西郡天神社付近に存在したと考えられており、神社境内には北約100mの字「八間堂」から出土したとされる塔心礎があるが、これまでに明確な伽藍配置などは確認されていない。近隣のこれまでの調査では、７世紀中葉～後半に比定される瓦が出土していることから、西郡廃寺は、７世紀中葉～後半に創建された古代寺院と考えられている。

また、当地は、西郡廃寺創建にかかわる時期以外にも、弥生時代後期に遡る居住域をはじめ、古墳時代初頭～後期、および平安時代後期以降中・近世の遺構・遺物なども多数検出されている。

今回の調査は西郡廃寺第９次調査で、ごく近隣で第３～７次調査（ＮＫＴ2006－３・ＮＫＴ2006－４・ＮＫＴ2008－５・ＮＫＴ2009－６・ＮＫＴ2010－７）が実施されている。また、当地西南西100mには萱振遺跡第７次調査地（ＫＦ8－７）が、西南西200mには山賀遺跡第３次調査地（ＹＭＧ94－３）が位置している。



第１図　調査地周辺図

表1　既出の調査地一覧表

略号	所在地	調査期間	調査原因	主な検出遺構	主な出土遺物	参考文献
NKT 2006-3	泉南三	2006/10	工場建設	弥生集落東～奈良-平安-掘・小穴	弥生集落東～奈良-弥生土器・土師器・須恵器・瓦	元島孝恒　2009. 3『Ⅳ　西郡廃寺第3次調査(NKT2009－3)』財団法人八尾市文化財調査研究会報告127
NKT 2006-4	泉南三	2007/1～4	店舗建設	古墳前期-河川、古墳後期-掘建柱建物、奈良-土坑、平安～鎌倉-井戸、道路-井戸・溝	古墳中期-埴輪	原有公助　2012『西郡廃寺第4次調査』財団法人八尾市文化財調査研究会報告137』財団法人八尾市文化財調査研究会
NKT 2008-5	泉南三	2008/12～2009/1	公共下水道	古墳-ピット、中世-溝、古墳-土壙	古墳時代-須恵器、中世-土師器・須恵器・土製土錘・白磁	末村雄明　2010. 3『Ⅳ　西郡廃寺第5次調査(NKT2008－5)』財団法人八尾市文化財調査研究会報告129
NKT 2009-6	泉南三	2009/7～9	工場建設	古墳前期(布留式期)～小穴、古墳後期-土坑1、平安後期-土坑1・小穴10	古墳前期-土師器・須恵器	原有公助　2010. 6『15. 西郡廃寺第6次調査(2009－6)』『平成21年度　(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』
NKT2010-7	泉町三	2010/5～8	工場建設	古墳後期-井戸2、中世-井戸2・土坑5	弥生後期-弥生土器、古墳初期-古式土師器、古墳後期-土師器・須恵器、中世-土師器・瓦器・白磁	菊石　薫　2011. 6『(10)西郡廃寺第7次調査(2010－7)』『平成22年度　(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』
NKT2010-8	泉町二	2010/9～10	公共下水道	中世-土坑2・河川1	古墳前期-古式土師器、古代～中世-土師器・須恵器・瓦	平岡真一　2011. 6『(9)西郡廃寺第8次調査(2010－8)』『平成22年度　(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』
NKT2011-9	泉町三	2011/4～5	工場建設	平安末～鎌倉-井戸1・土坑2・土穴4・溝2・時期不明-掘立柱建物、近世-井戸1・河川1	弥生後～後期-土器・石器、古墳-古式土師器・須恵器、奈良-土師器・瓦器、古墳-陶邑窯・瓦	今回報告
NKT88-7	泉町二	1988/2～3	倉庫建設	古墳前期-小穴・溝、古墳後期-建物・井戸・土坑・溝等からなる居住域、近世-水田	古墳前期-庄内式甕形の土器組・木製品(広鍬・方形盤)、古墳後期-土師器・須恵器・瓦	原田昌則　1990. 7『Ⅰ　当該遺跡(第6次調査)』財団法人八尾市文化財調査研究会報告62
NKT90-3	山賀町西	1990/1～2	宅・研修施設建設	弥生前期-土坑9・小穴21・溝3	弥生-土器(第1様式前段階)	原田昌則　2004. 12『1　山賀遺跡(第3次調査)』財団法人八尾市文化財調査研究会報告81

2．調査概要

1）調査の方法と経過

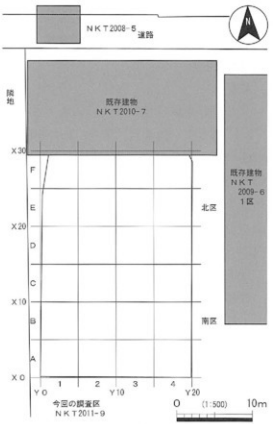
今回の発掘調査は、工場建設工事に伴うもので、当調査研究会が西郡廃寺で実施した第9次調査にあたり、同一の工場敷地内では過去に2度の調査を行っている(第6・7次調査)。調査は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財発掘調査指示書に基づき、機械掘削1.0m、人力掘削0.3mを基本としたが、現代の攪土・掘乱が現地表(T.P.＋5.5m前後)下1.5m前後まで及んでおり、2m以上に達する掘乱部分とともに、重機で掘削し、以下の0.2～0.3m程度を人力によって掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。

調査区は第6次調査地の西、第7次調査地の南に接し、東西18m・南北27m・面積486㎡を測る。敷地に余地が無かったために、調査区はほぼ中央で南北2区に分け、南区から調査を行い、南区の調査終了後埋め戻し、北区の調査を行った。地区割りについては、調査区南西隅に基準点(X0・Y0)を置き、それぞれ5m間隔で東西は西から1～4、南北は南からA～Fとし、1A～4Fの小地区を設定した。高さの基準は、調査地北東100mの街区多角点10A15(T.P.+4.806m)を使用した。

調査の結果、平安時代末期～鎌倉時代の遺構、及び近世の遺構・河川のほか、弥生時代前～後期の土器・石器、古式土師器、土師器、須恵器、瓦器、木製品、瓦などが出土した。遺物の出土量は、コンテナ(縦0.6m×横0.4m×深さ0.2m)に6箱である。

2）基本層序

現地表(T.P.+5.5m前後)下1.5～1.6mまでは、旧工場建物建設・解体時の整地・盛土・撹乱層で、以下の地層は、調査区西・北・東壁のみで部分的に確認できた程度である。そのうち、西壁でのみ、近～現代から平安時代末期頃までに至る地層(１～７層)が確認できた。



第２図　調査区位置図

０層:盛土・撹乱層、層厚1.5m以上。

１層:青灰色粘土ブロック混じり礫、層厚0.1m前後、調査区中央部の西壁付近で検出した。おそらく近世～近現代(工場建設前)の作土と考えられる。

２層:褐色粘土、層厚0.1～0.2m。１層同様と調査区中央部の西壁付近で検出した。撹拌された細かいブロック層で、１層同様近世～近現代の作土と考えられる。

３層:褐色粘土、層厚0.1～0.2m。調査区中央北寄りの西壁付近で検出した。２層に対応する可能性があるが撹拌されておらず、１・２層の床を形成する地層である。

４層:青灰色粘土、層厚0.1m未満。調査区北部西壁で検出した。直下の７層上面の落込みに４層が堆積しており、７層に対応する遺構埋土・遺物包含層の可能性がある。なお、調査区北東隅で検出した近世の河川ＮＲ１は、４層を切っている。

５層:灰色紬～粗粒砂の互層、層厚0.1～0.2m、調査区中央部の西壁付近で検出した。３層以下に堆積しており、ＮＲ１の埋土の可能性もあるが、平面的に確認できていない。

６層:灰色細粒砂、層厚0.1m未満。調査区中央北寄りの西壁付近で検出した。５層同様、ＮＲ１に因む可能性がある。

７層:灰色礫、層厚0.4m以上を確認した。平安時代末期頃の遺構面で、上面の標高は南西部が3.8m、北西部が3.5m、北東部が4.0m前後を指し、南東から北西に向かって下がっている。この層上面で、平安時代末期～鎌倉時代の井戸１基、土坑２基、小穴４個、溝２条、近世の井戸１基、河川１条を検出した。

3）検出遺構と出土遺物

・平安時代後期～鎌倉時代の遺構

井戸（ＳＥ）

ＳＥ１

２Ｅ～Ｆ地区で検出した。近世の河川ＮＲ１や近年の攪乱などで削られており、底の一部がわずかに残っていただけである。平面形状は東西方向に長い楕円形で長径2.5m、短径1.8mを測る。断面形状は逆台形で、深さ約0.3mを測る。掘形の北西よりに曲物が据えてあり、掘形からは、曲物の一部の他、板材３点、瓦器椀１点、弥生土器１点が出土している。この内１点（１）を図化した。１は瓦器椀である。体部は内湾し、口縁部は若干外反する。端部は丸く終わる。底部には断面逆台形の高台が貼り付く。内面には見込みから体部上位まで螺旋状ヘラミガキを、外面は横方向のヘラミガキを施す。平安時代後期の12世紀後半頃に比定される。

土坑（ＳＫ）

ＳＫ１

１Ｂ地区で検出した。遺構の西側は調査区外に至るため形状および規模は不明である。検出した部分の平面形状は直線的に掘られており、北側に段がある。東西長0.3m、南北長1.6m、深さ0.3mを測る。埋土は上から青灰色粘土、青灰色粘土で褐灰色粘土のブロック混入、褐色粘土である。内部からは土師器・黒色土器・瓦器等が出土している。このうち３点（２～４）を実測した。２は黒色土器椀である。体部は内湾する。口縁部は尖りぎみに丸く終わる。体部の内外面は横方向のヘラミガキを密に施す。平安時代前期の10世紀代に比定される。３は瓦器椀である。口縁部は丸く終わる。体部の内外面は横方向のヘラミガキを施す。４は土師器甕である。口縁部は「く」の字に屈曲し外反する。端部は上方へつまみ出し、面を形成する。体部の内外面はナデ、口縁部の内外面はヨコナデを施す。３と４は平安時代後期の12世紀代に比定される。

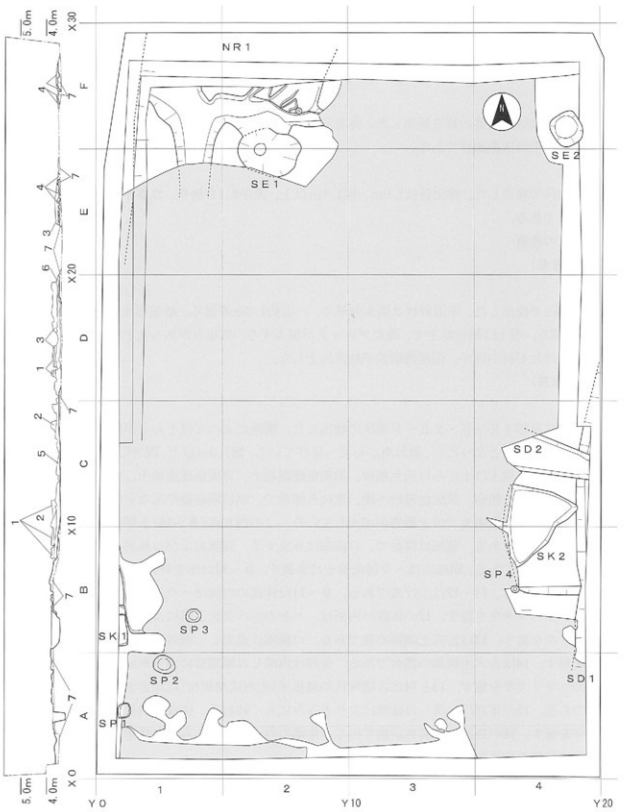
ＳＫ２

４Ｂ～Ｃ地区で検出した。西部は攪乱により切られている。埋土は礫混じり粘土で、内部からは弥生土器・石器（石鏃未成品）・土師器等が出土している。この内１点（５）を図化した。５は石鏃の未成品である。両面には鏃が確認でき、縁辺は剥離調整を行う。弥生時代中期頃に比定される。

小穴（ＳＰ）

ＳＰ１～ＳＰ３

１Ａ～Ｂ地区で検出した。ＳＰ１は隅丸の長方形で、一辺0.5～0.85mを測る。ＳＰ２・３は楕円形で、長径0.6～0.9m、短径0.5～0.8mを測る。深さは0.1～0.5mで、埋土は青灰色礫に粘土のブロックが混入する。ＳＰ１～３は約2.4mの間隔で南西－北東に並んでおり、建物等を構成する柱穴の可能性が高い。ＳＰ１とＳＰ２から古式土師器の細片が出土した。この内２点（６・７）を図化した。６はＳＰ１から出土した古式土師器の甕である。口縁部は「く」の字に屈曲し外反する。端部は面を形成する。体部の内面はヘラケズリ、外面はハケナデを施す。口縁部の内外面はヨコナデを施す。７はＳＰ２から出土した古式土師器の甕である。口縁部は「く」の字に屈曲し外反する。端部はやや内側につまみ出し面を形成する。口縁部の内外面はヨコナデを施す。６と７は古墳時代初頭後半（庄内式期）に比定される。



1：青灰色粘土ブロック混礫
2：褐色粘土のブロック
3：褐色粘土
4：青灰色粘土
5：灰色細～粗粒砂の互層
6：灰色細粒砂
7：灰色礫

※網掛け部分は攪乱

0　(1:150)　5m

第３図　平・断面図

ＳＰ４

４Ｂ地区で検出した。平面形状は円形で、径約0.3ｍを測る。断面形状はＵ字形で、深さは0.2ｍを測る。埋土は褐色礫で、褐灰色粘土のブロックが混入する。

溝（ＳＤ）

ＳＤ１

４Ａ～Ｃ地区で西側の肩を検出した。南北方向に延び、検出長は9.0ｍ、幅0.6ｍ以上、深さ0.1を測る。埋土は灰色細砂である。

ＳＤ２

４Ｃ地区で検出した。検出長は2.0ｍ、幅1.4ｍ以上、深さ0.1を測り、ＳＤ１を切る。埋土は褐色シルトである。

・近世の遺構

井戸（ＳＥ）

ＳＥ２

４Ｆ地区で検出した。平面形状は隅丸方形で、一辺約1.3ｍを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.6ｍを測る。埋土は褐色粘土で、礫のブロックが混入する。石組みがあったと思われ、埋土からは火を受けた石材のほか、国産陶磁器が数点出土した。

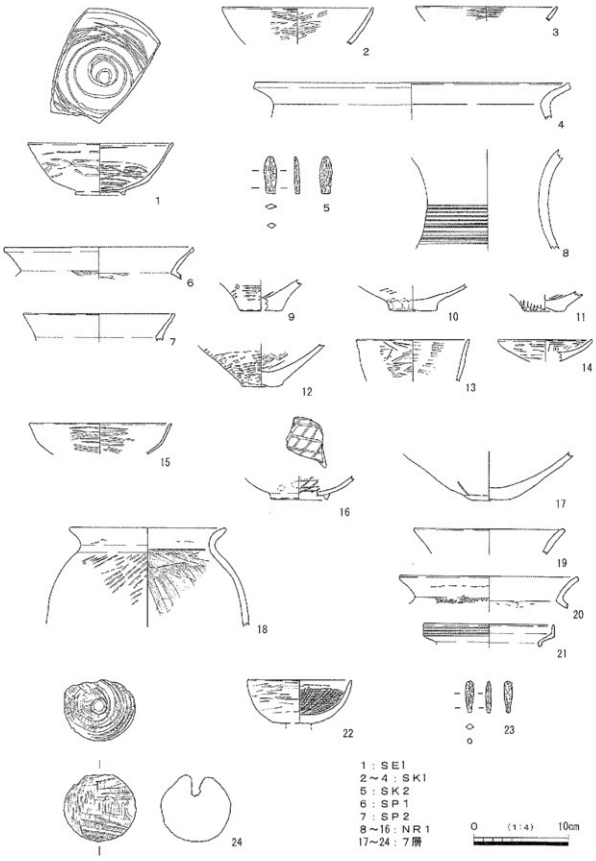
河川（ＮＲ）

ＮＲ１

調査区北西部１Ｅ～Ｆ・２Ｅ～Ｆ地区で検出した。撹乱によってほとんどが削られており、不明瞭な形での検出となったが、概ね南から北へ延びている。幅7.0ｍ以上、深さ0.6ｍ以上を測り、ＳＥ１を切る。埋土は上から白灰色粗砂、黒褐色礫混粘土、青灰色礫混粘土、青灰色シルト、褐色粘土混礫、褐色粗砂、黄灰色粗砂～礫、青灰色細砂で、国産陶磁器や瓦などのほか、弥生時代前期～平安時代後期頃までの土器等が出土している。この内９点（８～16）を図化した。８は弥生時代前期末の壺である。頸部は筒状で、口縁部は外反する。頸部および口縁部の内面はナデ、外面はヘラミガキである。頸部にはヘラ描沈線を12条施す。９～12は弥生時代後期の甕である。９・10の底部は突出し、11・12は上げ底である。９～11は体部の内面はヘラ状工具によるナデ、外面は右上がりのタタキを施す。12の体部の内面は、ハケのちヘラ状工具によるナデ、外面は右上がりのタタキを施す。13は古式土師器の壺である。口縁部は直立し、内外面ともに横方向のヘラミガキを施す。14は古式土師器の器台である。受部は内湾し口縁端部は面を形成する。内外面は横方向のヘラミガキを施す。13と14は古墳時代初頭後半（庄内式期新相）に比定される。15・16は瓦器椀である。15の体部は内湾し口縁部は尖りぎみに丸く終わる。体部の内外面は横方向のヘラミガキを施す。16の底部には高台が貼り付く。体部の内面には見込みに斜格子状の暗文を施す。平安時代後期の12世紀代に比定される。

遺構に伴わない出土遺物

７層および撹乱土内からは、弥生時代前・後期、古墳時代初頭～前期（庄内式期・布留式期）、古墳時代中～後期、奈良時代、平安時代以降の土器を主とする遺物が出土した。この内８点（17～24）を図化した。17は弥生時代後期の甕である。底部は突出する。18・19は弥生時代後期の甕で


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
1：ＳＥ１
2～4：ＳＫ１
5：ＳＫ２
6：ＳＰ１
7：ＳＰ２
8～16：ＮＲ１
17～24：７層
0　(1:4)　10cm

第４図　出土遺物実測図

ある。18の体部の外面には右上がりのタタキを施す。20は古式土師器の甕、21は古式土師器の吉備系の甕である。20の体部の内面はヘラケズリ、外面は細筋のタタキを右上がりに施す。21の口縁部は受口状で外面には擬凹線を施す。22は古式土師器の椀形の高杯である。内外面は横方向のヘラミガキを丁寧に施し、内面には放射状の暗文がある。20～22は古墳時代初頭前半(庄内式期)に比定される。23はサヌカイト製の石錐と思われる。両面には鏑が確認でき、断面は菱形である。先端は欠損している。弥生時代中期頃に比定できる。24は用途不明の木製品である。球形で全面に加工痕が残り、研磨されている。一ヶ所貫通しない穴がある。

3．まとめ

今回の調査では、調査区の中央部に大規模な撹乱があったが、その中で遺存状況の良い遺構を検出することができた。これまでの周辺の調査同様、平安時代後期～鎌倉時代(12～13世紀)の遺構の広がりが確認できたことは大きな成果と言える。西郡廃寺の創建・存続時期に帰属する遺構は検出されず、遺物も少量出土したに過ぎない。このことは、西郡廃寺の伽藍配置等を検討するうえでも重要なことと考えられる。ベース層である7層中には、弥生時代前・後期、古墳時代初頭～前期の遺物が含まれており、当地周辺にはその頃まで、旧河川が流下していたものと考えられる。

【参考文献】
・原田昌則1996「Ⅱ　堂振遺跡第７次調査(ＫＦ88－７)」『堂振遺跡　財団法人八尾市文化財調査研究会報告52』財団法人八尾市文化財調査研究会
・高萩千秋2000「Ⅲ　西郡廃寺遺跡第１次調査」『八尾市立埋蔵文化財調査センター報告１』八尾市教育委員会財団法人八尾市文化財調査研究会
・河村恵理2007「Ⅱ　西郡廃寺遺跡第２次調査(ＮＫＴ2005－２)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告96』財団法人八尾市文化財調査研究会
・原田昌則2007「Ⅰ　堂振遺跡第16次調査(ＫＦ94－16)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告95』財団法人八尾市文化財調査研究会
・西村公助2012「Ⅰ　西郡廃寺第４次調査(ＮＫＴ2006－４)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告137』財団法人八尾市文化財調査研究会

図版1

機械掘削終了時（南から）

ＳＫ１（西から）

１Ａ～Ｂ地区　ＳＫ１・ＳＰ１～３（北西から）

ＳＫ１（東から）

南区全景（北東から）

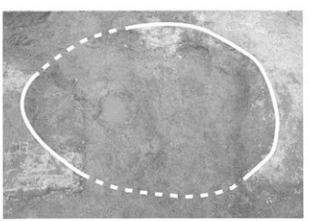
図版2

南区東部（１Ａ～３Ｃ地区）　北東から

南区東部（３Ａ～４Ｃ地区）　北東から

図版３

北区全景　北東から



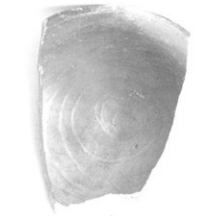
２Ｅ～Ｆ地区　ＳＥ１　北から

１～２Ｆ地区　ＮＲ１北壁

ＳＥ１周辺トレンチ内遺物出土状況　西から

４Ｆ地区　ＳＥ２　南から

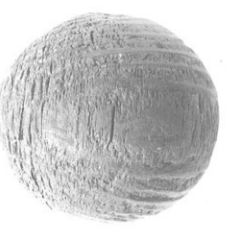
図版4

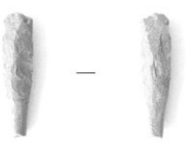


5

1

20





23

24

SE1(1)　SK2(5)　7層(20・23・24)

報 告 書 抄 録

ふりがな	かやふりいせき　きたきのもと2ちょうめいせき　じょうほうじいせき　なかたいせき　にしごおりはいじ
書　名	萱振遺跡　北水の本２丁目遺跡　成法寺遺跡　中田遺跡　西郡廃寺
副書名	
巻　次	
シリーズ名	公益財団法人　八尾市文化財調査研究会報告
シリーズ番号	151
編集者名	Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ吉村公助　Ⅲ・Ⅳ坪田真一　Ⅵ成海佳子・吉村(編)
編集機関	公益財団法人　八尾市文化財調査研究会
所 在 地	〒581－0821　大阪府八尾市幸町４丁目58－２　TEL・FAX　072－994－4700
発行年月日	西暦2016年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査 原因
かやふりいせき 萱振遺跡 (第28次調査)	おおさかふやおしあさひがおかいちょうめ 大阪府八尾市旭ヶ丘一丁目	27212	65	34度37分 53秒	135度36分 38秒	20130423 ～ 0501	約32.5	分譲住宅建設
きたきのもとにちょうめいせき 北水の本２丁目遺跡 (第１次調査)	おおさかふやおしきたきのもとにちょうめ 大阪府八尾市北水の本二丁目	27212	9573	34度36分 32秒	135度35分 32秒	20130805 ～ 0809	約29	店舗新築
じょうほうじいせき 成法寺遺跡 (第27次調査)	おおさかふやおしみなみほんまち2ちょうめ 大阪府八尾市南本町二丁目	27212	73	34度37頃 24秒	135度36分 16秒	20130708～ 0710	約18	分譲住宅建設
なかたいせき 中田遺跡 (第55次調査)	おおさかふやおしやおきたまちょうめ 大阪府八尾市八尾木北六丁目	27212	28	34度36分 44秒	135度36分 56秒	20121022～ 1029	約31	サービス付高齢者向け住宅建設
にしごおりはいじ 西郡廃寺 (第６次調査)	おおさかふやおしいずみちょうちょうめ 大阪府八尾市泉町三丁目	27212	46	34度38分 57秒	135度36分 17秒	20090713 ～ 0731	約356	工場建設
にしごおりはいじ 西郡廃寺 (第９次調査)	おおさかふやおしいずみちょうさんちょうめ 大阪府八尾市泉町三丁目	27212	46	34度38分 57秒	135度36分 17秒	20110425 ～ 0715	約486	工場建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
萱振遺跡 (第 28 次調査)	集落	弥生時代後期	小穴	弥生土器甕	
		古墳時代前期	土坑 小穴	古式土師器壺	
		平安時代	溝	黒色土器椀	
北水の本２丁目遺跡 (第１次調査)	集落	平安時代後期	土坑	土師器皿	
		鎌倉時代前期	小穴	瓦器椀	
		鎌倉時代後期	小穴 溝	土師器皿 瓦器椀	
成法寺遺跡 (第27次調査)	集落	鎌倉時代	井戸	瓦器椀	
		江戸時代	井戸 土坑	陶磁器 瓦	
中田遺跡 (第55次調査)	集落	中世～近世	溝		
		古墳時代前期末	古墳	円筒埴輪 形象埴輪	
		古墳時代初頭前半	土器溜墓	古式土師器壺	

西郡廃寺 （第６次調査）	集落	平安時代後期	土坑 小穴	土師器皿 丸瓦埋	
		古墳時代後期	土坑 小穴	土師器壺 須恵器蓋坏	
		古墳時代前期	小穴	古式土師器	
西郡廃寺 （第９次調査）	集落	近世	井戸 溝		
		平安時代末期～鎌倉時代	井戸	瓦器椀	

要　約	萱振遺跡では、弥生時代後期、古墳時代前期、平安時代の遺構を確認し、各時期の集落域は当遺跡の西部へ広がることが判った。北末の本立丁目遺跡では、平安時代後半～鎌倉時代後期の居住域の存在が明らかになった。成法寺遺跡では、中世以降安定した居住域となることが判明した。中田遺跡では、古墳時代初頃前半の居住域と墓域を確認し、両域が共存していることが判り、また、古墳時代前期末の古墳を確認した。西郡遺跡では、古墳時代前期、古墳時代後期、平安時代後期～鎌倉時代の居住域を確認した。

公益財団法人八尾市文化財調査研究会報告151

Ⅰ　萱振遺跡（第28次調査）
Ⅱ　北木の本２丁目遺跡（第１次調査）
Ⅲ　成法寺遺跡（第27次調査）
Ⅳ　中田遺跡（第55次調査）
Ⅴ　西郡廃寺（第６次調査）
Ⅵ　西郡廃寺（第９次調査）

発　行　　平成28年３月
編　集　　公益財団法人八尾市文化財調査研究会
〒581－0821
大阪府八尾市幸町４丁目58番地の２
TEL・FAX 072－994－4700

印　刷　　吉賀印刷株式会社
表紙　レザック66　＜260kg＞
本文　ニューエイジ　＜70kg＞
図版　ニューエイジ　＜70kg＞